慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マッカーサーと"バターンボーイズ"(一) : 日米開戦からバターン"死の行進"まで
Sub Title	MacArthur and Bataan boys : from the outbreak of U.S.-Japanese war to "death march" (1)
Author	増田, 弘(Masuda, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2008
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.81, No.6 (2008. 6) ,p.23- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20080628-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マッカーサーと〝バターンボーイズ〟(一)

——日米開戦からバターン〝死の行進〟まで——

増田弘

はじめに
(1) マッカーサーのフィリピンとの邂逅
(2) バターンボーイズの誕生
(3) 日米開戦前夜からマニラ脱出まで
(4) マニラ陥落と第一次バターン攻防戦
……(以上本号)
(5) コレヒドール脱出計画
(6) マッカーサー一行のコレヒドール脱出
(7) 第二次バターン攻防戦とバターン〝死の行進〟
おわりに
……(以上八一巻七号)

はじめに

日米両国におけるダグラス・マッカーサー(Douglas MacArthur)[1]米陸軍元帥への関心と人気は、彼の逝去からほぼ半世紀を経た今日でも、甲乙つけ難いほど高い。しかしマッカーサー研究の中身となると、両国間には大きな差異がある。アメリカでのマッカーサー研究は、誕生の経緯から、第一次世界大戦期、陸軍参謀総長期、在

フィリピン軍事顧問期、日米戦争期、対日占領期、そして朝鮮戦争時の解任まで、その八四年に及ぶ生涯の全体像（通史・人物史）や個々の時代状況と戦争への関与および、それらにおける彼の役割が、ほとんど隙間なく均等に論考されている。つまり、世界の危機的状況において、彼は戦略・戦術面に秀でた技能と卓越したリーダーシップをもって祖国アメリカを勝利へと導いた、類稀な英雄・軍人として高い威望を誇っている。これに比較して日本では、占領期五年半に及ぶ連合国最高司令官（SCAP）としてのマッカーサーに関心が特化されている。占領期こそが、現代日本の法制・政治・経済・軍事・社会・教育など多方面の原点であって、そのため、日本の方向性を決定した最高権威者としてのマッカーサーの資質が、善悪ともに問われるからである。結局、日米両国のマッカーサー研究の目的とその相違は、日米両国が辿った歴史の道程の反映なのである。

さて本稿は、戦後日本の占領期のマッカーサーではなく、それに先立つフィリピン時代のマッカーサーに焦点を当てる。とくにマッカーサーとその側近達、忠実なブレーンとしてマッカーサーを支え続けた、いわゆるバターンボーイズ（バターン〝ギャング〟ともいう。注は増田、以下断りのない限り同じ）との関係を中心に考察する。バターンボーイズとは、一九四二（昭和一七）年三月一九日、日本軍が防備を固める中、四隻の高速魚雷艇（PTボートと呼ばれる）でマッカーサーとともにコレヒドール島を脱出し、南方のミンダナオ島を経て空路オーストラリアへと逃亡した陸軍将兵一五名を指す。[2] マッカーサーと妻子、家政婦、随伴した二人の海軍将校を加えると総計二一名となる。[3] それは前年一二月八日の日米開戦からわずか三カ月後のことであった。

総兵力五万名もの日本軍の猛攻によって、バターン半島を守備する米比軍部隊八万余名は壊滅寸前となっており、事実上同胞を見殺しにしての逃避行は、フランクリン・ルーズベルト（Franklin D. Roosevelt）米大統領からの命令であったとはいえ、マッカーサーにとっては生涯最大の屈辱と汚点となった。あの有名な「アイ・シャル・リターン（I shall return）」は、この逃避行後の三月二〇日、メルボルンへ向かう途中のアデレード駅で彼が

記者団を前に発した言葉である。

しかしこの脱出劇が、生死を共にしたマッカーサーとバターンボーイズとの間に強固な絆をもたらした。以降、マッカーサーはこれらバターンボーイズとともにオーストラリアから反攻に転じ、ソロモン、ニューブリテン、ニューギニア、モロタイ、そして念願のフィリピンへと激戦を重ね、ついに宿敵日本を打倒して東京へと凱旋する。この過程で、すでにバターンボーイズは第三者の介入を許さないほどの特別な存在となっていた。転戦しながら移動する総司令部（GHQ）内でバターンボーイズは、威望高いマッカーサー総司令官の周囲に宮廷グループを築き上げ、その特権をもって部内を掌握した。「あいつはバターンボーイズだ」という、その一言が何者をも圧倒し、何事をも超越する〝免罪符〟となったのである。

翻って日本では、マッカーサーを本格的に取り上げた研究書が案外少ないが、アメリカでは優に七〇冊を上回り、近年でも新刊書が相次いでいる。しかしながら、バターンボーイズの動向に留意しながらマッカーサー論を展開している研究書は日米両国で皆無に等しい。マッカーサーの戦時下での卓越した軍事的指導力のみならず、戦後の対日占領行政もまた、マッカーサーの個人的知見と能力に止まらず、バターンボーイズら側近の政治の所産でもあるとすれば、占領時代に先立つフィリピン時代の動向はきわめて重要となる。それは、バターンボーイズが前述のフィリピン攻防戦の開始前後に誕生したからである。となれば、第一にバターンボーイズがどのような経緯で誕生したのか、第二に彼らの間でどのような役割分担がなされていたのか、第三に各人の資質や人間関係はどうであったのか、第四に彼らはどのような理由でマッカーサーの下を去ったのか、そして第五に彼らのマッカーサー観とはどのようなものであったのか、といった素朴な疑問への解答は、この特異なインナー・サークルを知る大前提となる。以上の意味で、本稿はバターンボーイズの初の本格的研究として、従来のマッカーサー研究に新たな視点を提示すると同時に、これまでのマッカーサー研究の空白を埋めるものとなろう。

本研究は、当然ながら、多くの先行研究から様々な教示を得ている。[4] またマッカーサー自身の回顧録や現代史料出版『マッカーサー・レポート』全四巻、日本側の『戦史叢書　比島攻略作戦』などを適宜参照した。[5] 米国立公文書館（NARA）およびマッカーサー記念図書館（MacArthur Memorial Library）では二度にわたる資料収集を行い、RG46を中心とする公文書を入手した。国立国会図書館憲政資料室所収の関連資料も大いに役立った。ただし本稿では、従来の研究に欠落しているバターンボーイズの「サザーランド文書」や近刊の「ロジャーズ文書」（ともにRG30）、またバターンボーイズを含むマッカーサー関係者の証言（前期マッカーサー記念図書館所蔵のオーラルヒストリー）に多く依拠していることを指摘しておきたい。[6]

（1）　一八八〇（明治一三）年一月二六日、アーカンソー州リトルロックに生まれる。ウエストポイント陸軍士官学校を首席で卒業。参謀本部勤務を経て第一次世界大戦中に少将へと昇進。陸軍士官学校長、陸軍参謀総長を歴任。米極東軍司令官として太平洋戦争勃発を迎え、終戦後は連合国最高司令官として日本占領統治の最高責任者となる。朝鮮戦争に際しては国連軍最高司令官を兼務するが、一九五一（昭和二六）年四月、トルーマン大統領によってその地位を解任されて帰国する。一九六四（同三九）年四月五日、ワシントンのウォルターリード病院で死去。享年八四歳。その棺はバージニア州ノーフォークのマッカーサー記念館内に安置されている。

（2）　参謀長サザーランド（Richard K. Sutherland）少将（のち中将）、参謀次長マーシャル（Richard J. Marshall）准将（のち少将）、技術部長ケーシー（Hugh J. Casey）准将（のち少将）、通信部長エーキン（Spencer B. Akin）准将（のち少将）、砲術部長マーカット（William F. Marquat）准将（のち少将）、航空部隊長ジョージ（Harold H. George）准将、作戦部長スティバース（Charles P. Stivers）大佐（のち少将）、情報部長ウイロビー（Charles A. Willoughby）大佐（のち少将）、副官ディラー（LeGrande A. Diller）中佐（のち准将）、副官ウイルソン（Francis H. Wilson）中佐（のち大佐）、副官ハフ（Sidney L. Huff）中佐（のち大佐）、通信部次長シャー（Joseph R. Sherr）中佐（のち大佐）、医療担当副官モアハウス（Charles H. Morhouse）少佐（のち中佐）、情報部次長マクミッキング（Joseph R. McMicking）大尉、速記者兼タイピストのロジャーズ（Paul P. Rogers）軍曹（のち少尉）の計一五名である。

(3) 海軍から第一六海軍区司令官ロックウェル(Francis W. Rockwell)少将、同参謀長レイ(H. James Ray)大佐、それにマッカーサー夫人(Jean Faircloth MacArthur)、息子アーサー四世(Arthur MacArthur, 4th)、家政婦アチュー(Ah Cheu)である。

(4) とくに以下の四冊は重要である。John Jacob Beck, *MacArthur and Wainwright: Sacrifice of the Philippines*, University of New Mexico Press, Albuquerque, 1974; Carol Morris Petillo, *Douglas MacArthur: Philippine Years*, Indiana University Press Bloomington, 1981; William B. Breuer, *MacArthur's Undercover War: Spies, Saboteurs, Guerrillas, and Secret Missions*, John Wiley & Sons, Inc., New York, 1995; Richard Connaughton, *MacArthur and Defeat in the Philippines*, The Overlook Press, Woodstock & New York, 2001である。また一般的なマッカーサー論としては、D. Clayton James, *The Years of MacArthur: Vol. I 1880–1941*, (1970): *Vol.* II, 1941–1945 (1975) Boston, Houghton Mifflin Com.; William Manchester, *AMERICAN CEASAR: Douglas MacArthur 1880–1964*, Brown and Company, Boston, 1978(鈴木主税・高山圭訳『ダグラス・マッカーサー(上)(下)』河出書房新社、一九八五年刊); Frazier Hunt, *The Untold Story of Douglas Macarthur*, The Devin-Adair Company, New York, 1954; Michael Schaller, *Douglas MacArthur: The Far Eastern General*, Oxford University Press, Inc., 1989(マイケル・シャラー著・豊島哲訳『マッカーサーの時代』恒文社、一九九六年刊)を参照した。とくにシャラーの考察は、従来のマッカーサー研究を批判的にとらえ、マッカーサー個人への厳しい視点を提示しており、興味深い。

(5) Douglas MacArthur, *REMINISCENCES*, The General Douglas MacArthur Memorial Foundation, 1964(ダグラス・マッカーサー著・津島一夫訳『マッカーサー大戦回顧録(上)(下)』中央公論新社〈中公文庫〉二〇〇三年刊)、現代史料出版『マッカーサー・レポート』(*Report of General MacArthur: The Campaigns of MacArthur in the Pacific, Volume* I, II, III, IV)全四巻、日本側の防衛庁防衛研修所戦史室著『戦史叢書比島攻略作戦』(朝雲新聞社、一九六六年刊)などを適宜参照した。

(6) 論者は、二〇〇三年八月一五日から二五日まで、また二〇〇七年九月三日から一〇日まで二度資料収集を行った。その過程でReston Indexing and Researchのジョン・ヘッファーナン(John R. Hefferman)氏、マッカーサー図書館のジェームズ・ゾッベル(James Zobel)氏、国立国会図書館憲政資料室課長の山田敏之氏から多大な協力を得た。ま

た新聞・雑誌等の資料収集やその他で山本礼子氏にもご尽力をたまわった。ここに厚く御礼を申し上げたい。

(1) マッカーサーのフィリピンとの邂逅

1 三度のフィリピン赴任

マッカーサーのフィリピンとの邂逅は複合的である。最初の接点は実父アーサー・マッカーサー二世（Arthur MacArthur, Jr.）まで遡る。一八九九（明治三二）年六月、一九歳のダグラスはウエストポイント陸軍士官学校に首席入学するが、当時、父アーサーはフィリピン軍事総督（陸軍中将、のち陸軍少将）として米西戦争後のマニラ占領に関与したほか、現地の反乱鎮圧に従事していた。ダグラスは深く尊敬する父が活躍する遠いアジアの地に人一倍思いをはせたであろう。ただし一九〇三（同三六）年六月に平均点九八・一四点という記録的な成績で首席卒業した時点では、アーサーはフィリピン初代総督（のち米大統領）のウイリアム・タフト（William Howard Taft）と対立して、本国に召還された直後であった。

それでもダグラスは、陸軍のエリートコースである工兵隊を志願し、同年一〇月、少尉としてフィリピンに赴任する（二三歳）。これがマッカーサーのフィリピンとの初の邂逅であった。彼はマニラ軍管区勤務となり、マニラ湾の改良、コレヒドール島の要塞構築、バターン半島の道路建設などに関与した。この頃、新進政治家のエマニュエル・ケソン（Emanuel L. Quezon）やセルジオ・オスメーニャ（Sergio Osmena）の知遇を得た（両者ともにのち比大統領）。とくにケソンとは生涯の親交を結び、後年、二人は日米開戦後のコレヒドール島で数カ月も苦難の日々を送ることになる。ところがダグラスはフィリピンでマラリアにかかり、翌一九〇四（同三七）年一〇

月、帰国を余儀なくされた。こうして彼のフィリピン赴任期間はわずか一年で終わった。[1]

ところが再び父アーサーがダグラスをアジアへと引き戻す。日露戦争の観戦武官として満州に派遣されていたアーサーは、一九〇五(同三八)年初めに駐日アメリカ大使館付武官を命じられると、ダグラスをその副官として日本へ呼び寄せたのである。ダグラスは同年一〇月、東京に到着する。その四〇年後、日本占領軍の最高司令官としてこの国を統治することになろうとは、彼はよもや夢想だにしなかったであろう。その後ダグラスは両親と三人で八カ月に及ぶアジア視察旅行を行った。この身内での旅行を通じて、アジア諸国から様々な啓発を受け、もはや彼にとってアジアはヨーロッパよりも身近な地域となったのである。

ダグラスは帰国後、ホワイトハウス付武官を振り出しに、参謀本部勤務と出世街道を駆け上っていく。一九一四(大正三)年夏の第一次世界大戦勃発から二年後、マッカーサー少佐は陸軍長官付軍事補佐官となると、「市民軍」のアイデアを提案し、これによって第四二師団(レインボー師団)が編成された。また新聞検閲官を務めることは、マスコミ報道の重要性を認識すると同時に、宣伝のノウハウを習得する機会となった。この経験の成果がのちのフィリピン攻防戦など太平洋戦争全般を通じ、対マスコミ面で遺憾なく発揮されるのである。陸軍省は三六歳にすぎないマッカーサーを大佐に特進させ、このレインボー師団の参謀長に任命した。こうしてマッカーサーはフランス戦線で待ち望んでいた実戦を初体験する。

戦場でのマッカーサーは大胆不敵で、常に前線で部隊を指揮し、ヘルメットを使用しなかった。それは南北戦争で大活躍した父の血統によるものであったかもしれない。八つの大きな戦闘に参加して二度負傷したが、合計一五の勲章を得て、わずか三八歳で准将、つまり将軍へと昇進したのである。もちろん最年少記録であった。その後、歩兵旅団長、師団長となり、冬の四カ月間、ライン河西岸のドイツ占領行政に参加するという貴重な経験をした。これもまた後年の対フィリピン行政、続く日本での占領行政の先駆けとなった。

一九一九（大正八）年四月に帰国。その後もマッカーサーの栄光は続いた。母校のウエストポイント陸軍士官学校の学校長を三年にわたり務め、古い体質を改めて、同校をより現代的な職業軍人を育成する場へと変革した。他面、私生活ではワシントン社交界の花形ルイーズ・クロムウェル・ブルックス（Louise Cromwell Brooks）と結婚し、〝軍神と百万長者の結婚〟とマスコミに騒がれた。そして一九二二（同一一）年一〇月、新妻とともにフィリピンに赴任し、マニラ軍管区司令官兼フィリピン・スカウト（米陸軍のフィリピン人部隊）旅団司令官に就任する。一八年ぶり、二度目の勤務であり、父アーサーを知る現地の人々から〝マッカーサー若将軍〟と呼ばれた。この若将軍は老将軍と同様、人種差別に眉をひそめ、上院議長となっていたケソンやその友人たちとの交友を深めた。またコレヒドール島対岸のバターン半島にも足を運び、四〇マイルの道のりを踏破して地図を作成するなどの意欲を示した。のちの日米開戦後、マッカーサーは「自分はバターン半島をよく知っている」と豪語するが、それはこのときの経験を踏まえた発言であって、必ずしも虚勢とはいえなかった。(2)

しかし華やかな社交界好みのルイーズと、仕事優先で厳格な生活を好むマッカーサーとの結婚生活は五年で破綻し、二人は一九二九（昭和四）年に正式に離婚する。この間の一九二五（大正一四）年一月、母親ピンクニー（通称ピンキー）(3)の後援もあって、彼は米陸軍史上最年少の四四歳で少将となった。そして同年四月にはフィリピンでの三年間の勤務を終えて帰国した。以後、国内の二カ所の軍管区司令官を歴任したほか、第九回アムステルダム・オリンピック大会のアメリカ選手団団長も務めた。

帰国から三年を経た一九二八（昭和三）年八月、マッカーサーは三度フィリピンへ配属されることとなった。今度はフィリピン方面軍司令官という栄光のポストであり、それは父アーサーが就いた地位でもあった。彼はフィリピン・スカウトの訓練と、その給与および地位の向上に尽力し、現地で人気を高めた。マッカーサー自身はこの部隊を将来のフィリピン防衛の鍵を握るものと考えていたから尽力したのであるが、彼がフィリピン人を対

等に扱うことや、ケソンら現地の有力者との親交を深めたことも高い評価をもたらしたのである。結局マッカーサーはケソンらが熱望するフィリピンの「漸進的独立論」を支持するにいたる。(4)

しかしマッカーサーは日本の脅威にいかに対処するかという軍事戦略問題について悩まざるをえなかった。ワシントンでは一九〇四（明治三七）年に、もしも日本がフィリピンへと侵攻するという「緊急事態が生じた場合、「防衛線をバターン半島まで後退させ、半島とコレヒドール島によって六カ月間戦線を維持する、その間にアメリカ本国から救援軍が到着する」という作戦案が採択されていた。これが「オレンジ・プラン（戦略案）（いわゆるWPO）」であり、その後改訂が加えられて、「WPO1」、「WPO2」、「WPO3」までが立案された。マッカーサーはこれらオレンジ・プランすべてに疑問を抱いていた。この防御戦略が正しいものとは思えなかったし、これを実行に移すにしても、当時フィリピンの米比軍はわずか一万七〇〇〇名の兵力にすぎず、この群島の防衛はまったく不可能と考えられたからである。加えて、日本人の増加問題もあった。日本から移って来たサトウキビ農場労働者や商売人などの数がフィリピン各地で増加しており、ミンダナオ島ではとくに増加率が高かった。ところが現地のケソンや実業家たちはこれを脅威と見ずに、むしろ新来者がフィリピンに資本と事業をもたらして経済停滞を打破するものと理解する点でマッカーサーとは異なっていた。(5)

2　陸軍参謀総長

一九三〇（昭和五）年九月、マッカーサーはハーバート・フーバー（Herbert C. Hoover）大統領の命令でフィリピンを去り、一一月にワシントンで第八代目の陸軍参謀総長に就任した。五〇歳の陸軍大将（待遇）は、陸軍での最年少記録を更新した。参謀総長は父アーサーが夢見て就けなかった最高ポストであり、陸軍に深い恨みを抱いて逝った父の怨念を息子が晴らしたともいえる。母親のピンキーは、息子の四つ星をなでながら、「お父さ

んが今のあなたを見たら、どんなに喜んだことだろうね」とささやいたという。

しかしこの地位は決して楽ではなかった。当時、〝経済恐慌〟の嵐が全米に吹き荒れており、議会は軍事予算と陸軍将校の大幅削減を求めた。これに対してマッカーサーは、議事堂内を走り回って陸軍の立場および国防の必要性を訴えた。その結果、ようやく軍事予算を通すことに成功し、陸軍将校の定員削減案を阻止できた。しかし一九三二（昭和七）年の〝ボーナス・マーチ事件〟は、彼の人格と経歴に陰影をもたらした。大戦に参加した軍人とその家族たちは「ボーナス」と呼ばれる軍務補償債券の即時支払いを求めて、全国からワシントンに集まったが、マッカーサーは大統領の退去命令に従い、催涙ガスを使用して約一万人のデモ隊を鎮圧した。彼は後世までこの事件を共産主義者による陰謀と信じて疑わなかった。結局マッカーサーは四年の任期を一年延長して五年という長期間、参謀総長を務め、米軍の軍政改革を試みるなど、行政官としての才能も遺憾なく発揮したのである。

さてこの地位の退任を前にして、五五歳のマッカーサーはフィリピンに自己の第二の人生を見出す。当時フィリピンは大きな変革期を迎えつつあった。一九三四（同九）年、アメリカは「タイディングズ・マクダフィー法（Tydings-McDuffie Act）」を成立させ、一九四六（同二一）年七月四日にフィリピンがアメリカから独立することを認め、四八年に及ぶ支配に終止符を打つことにしたのである。こうして翌三五（同一〇）年、フィリピンは念願の独立に向けた臨時政府である「コモンウェルス（Commonwealth、以下「連邦政府」とする）」を発足させた。しかし重要な問題が一つあった。それは日本がフィリピンに脅威を及ぼしていることであった。この群島の防衛はきわめて難しかった。マッカーサーは旧友ケソンからフィリピン防衛のための協力を懇願されると、「もし十分な人員と資金と軍需品が可能となれば防衛できる」と答え、参謀総長の任期終了後にフィリピン陸軍の創設事業への関与を承諾したのである。(6)

この転身を決意させた背景として、ルーズベルト大統領との関係も見逃せない。保守主義者のマッカーサーは、社会主義的なニューディール政策を掲げる民主党のルーズベルトとは意見が合わなかったし、かつて海軍次官を長期にわたって務めたルーズベルトは、大統領就任後も比較的海軍重視であり、マッカーサーの陸軍重視とは異なっていた。またルーズベルトはマッカーサーに対して、「ダグラス、私は君がこの国で最も優秀な将軍だと思うが、政治家としては君は最悪だろうね」と率直に述べたことすらあった。加えて、この時期にマッカーサーはフィリピン女性との間の訴訟問題を抱えており、これもマッカーサーをしてフィリピン転任を促した隠れた要因であったかもしれない。(7)

3　ケソンの軍事顧問から米極東軍司令官へ

マッカーサーは一九三五(昭和一〇)年一〇月一日、ケソンの軍事顧問に就任した。軍事顧問団を認めるアメリカの法律と、ケソンの認めた個人的な取り決めによって、マッカーサーは軍の階級(ただし大将から少将に降格)と給与額を維持しつつ、フィリピン連邦政府からは気前の良い手当てと「元帥」の称号を受け取った。(8) この最後となる五度目のフィリピン赴任に際して、ワシントンからは多くの幕僚が彼に随行した。ウエストポイントの同級生で、フィリピンでは参謀長になる副官のドワイト・アイゼンハワー(Dwight D. Eisenhower)少佐(のち元帥、米大統領)もその中の一人であった。老いた八三歳の母親も同行していた。この赴任途上の船上では、劇的な出会いがマッカーサーを待ち受けていた。知的で裕福なテネシー生まれの独身女性ジーン・フェアクロス(Jean Faircloth)と恋に落ち、彼女はそのままマニラへと向かい、二人は二年後に正式に結婚するのである。(9)

マッカーサーのマニラ到着直後の一一月一五日、フィリピン連邦政府が発足した。ケソンは連邦政府の初代大統領に、オスメーニャが副大統領に就任した。そこでマッカーサーは、ケソンからの要望に応じてフィリピン防

衛計画に着手した。彼はスイスの市民兵制度に倣ってフィリピン陸軍の攻撃能力を高めるよう企図した。すなわち、全国を一〇軍区に分けて毎年四〇〇〇名が各軍区で訓練を受けることとし、全島に設けられた一二八カ所の基地で米比人の将校が訓練の責任を担い、一九四六（同二一）年までに四〇個師団、合計四〇万人の陸軍を設立するという計画であった。この計画の中にはまた、五〇隻の高速魚雷艇（いわゆるＰＴボート）から成る海軍と、二五〇機の航空機から成る空軍も含まれていた。彼がこのような野心的な計画を遂行するには、米比両国政府からの資金的支援を必須とした。そこでマッカーサーとケソンは、一九三七（同一二）年初めにワシントンを訪問した。マッカーサーの目的は軍事援助の獲得にあり、ケソンの目的は一九四六（同二一）年の独立予定を早めて「一九三八年末までの完全独立」を米政府に認めさせることにあった。しかし結果は散々であった。ケソンの要求はルーズベルトを怒らせ、マッカーサーの要望は無視された。十分な資金を獲得するには当初から障害が多すぎたのである。しかもフィリピン議会は軍事力の強化よりも公共事業の方を優先しようと考え、軍事予算を大幅に削減した。ケソン大統領の心も揺れ動いていた。(10)

それでもマッカーサーは、フィリピン人への軍事訓練を続けた。幕僚のアイゼンハワー、ジェームズ・オード（James Ord）両少佐もフィリピン防衛計画の作成に精を出した。そもそもアメリカには、前記のとおり対日戦争を想定した「オレンジ・プラン」があった。それは、米艦隊を中心とした兵力で太平洋のアメリカ領土を日本の脅威から守ることを基本目標としており、同艦隊の最大の拠点はフィリピンにあった。しかし第一次世界大戦後、日本が南洋群島（ミクロネシア）の委任統治国になったことに加え、飛行機の登場などから、艦隊中心のフィリピン防衛計画は頼りない存在になっていた。マッカーサー自身は、このプランはそのまま残し、一方でフィリピンの軍事的自立を目指した。しかしフィリピン国軍の拡充と発展のためには、アメリカの軍事援助は欠かせなかった。アイゼンハワーとオードはマッカーサー案を基本としてフィリピン防衛計画を作成したが、アメリカから

支援が得られない以上、その実現がきわめて厳しいと判断せざるをえなかった。

のちにコレヒドール脱出をPTボート隊を率いて成功させたチャールズ・バックレー(Charles Bulkeley)海軍大尉(のち少将)は、マッカーサーについて、「彼はロマンチストであり、フィリピン陸軍を訓練するための名誉と権利を与えられたが、それは結局〝在郷軍(militia)〟でしかなかった。限定された軍隊でしかなく、彼が最善としたフィリピンの防衛計画では、十分防衛を達成できるものではなかった」とその防衛計画を酷評している。[11]

それでもマッカーサーは「敵軍を沿岸で食い止める」との戦略に固執し、それを維持しようとした。戦車も大砲も機関銃もなく、輸送手段も十分ではないことに加えて、フィリピンの国防予算は削減されており、陸軍の陸上部隊ばかりか、空軍の戦闘機集団も海軍のPTボート艇隊もほとんど設立不可能であった。何よりも米陸軍省は一九四〇年代半ばにフィリピンが独立する以上、同群島の防衛に予算を配分するつもりなどなかった。[12] アイゼンハワーやオードは、もはやフィリピンを日本の攻撃から防護するとか、外部からの援助なしに侵略者を撃破するといった考え方は放棄していた。海空軍を作る資金がない以上、もし日本軍が侵攻してきた場合、フィリピン現地軍は日本軍相手に消耗戦を行い、強力な同盟軍が救援に来るまで時間を稼ぐ以外にない、との結論に達したのである。[13] 事実上、アイゼンハワーらはマッカーサーの方針を排したのも同然であった。

軍事問題に加えて、マッカーサーは政治的にも物議を醸した。連邦政府の設置によってフランク・マーフィー(Frank Murphy)がフィリピン総督の地位から初代の在フィリピン「高等弁務官」へと横滑りすると、密かにこの高等弁務官ポストに執心していたマッカーサーは、マーフィーと反目したのである。あるいはマーフィーをルーズベルトの〝番犬〟と見なしたからかもしれない。他方マーフィーは、マッカーサーがケソンと密議して、アメリカの「タイディングズ・マクダフィー法」の条件を骨抜きにしようとしていると応酬した。この対立に際して

ルーズベルトは一九三六（同一一）年に高等弁務官をマーフィーからポール・マクナット（Paul V. McNutt）へと交替させたため、事態はひとまず収拾されたが、マーフィーは退任前に、「マニラの軍事顧問がますます厄介者になっている」とワシントンに警告した。その影響のためか、フィリピン駐留の米陸軍正規軍（一個師団）は、マッカーサー軍事顧問への協力を拒むようになった。(14)

ところがマッカーサーがこうした苦境にあったとき、日米関係は急速に悪化していく。一九三七（昭和一二）年に日中戦争、一九三九（同一四）年には第二次世界大戦が勃発し、翌年九月にドイツに対しフランスが降伏すると、日本軍は北部仏印（ベトナム北部）へと進駐し、「日独伊三国同盟条約」が締結された。そして一九四一（同一六）年七月には重慶の蔣介石政権を支援するインドシナ・ルート（いわゆる援蔣ルート）を封鎖するため、日本軍はさらに南部仏印へと進駐したのである。同月二六日、アメリカ政府は直ちに在米日本資産の凍結と日本への石油の禁輸措置をとり、対日圧力を一段と強化させた。すでに六月の独ソ開戦により、イギリスはドイツの脅威から逃れていた。一方の日本は独ソ開戦によってソ連の圧力から逃れることになり、南方へと自由に進出できるようになった。しかし他面、アメリカもまた太平洋方面で日本に対して強硬姿勢に転じるようになったのである。

このように日米両国の関係が険悪化すると、俄然フィリピンの防衛が緊急課題となった。その結果、ワシントン、マニラ間の摩擦は棚上げされた。ルーズベルトは米極東陸軍（USAFFE）司令部をマニラに創設し、一九三七（同一二）年末に引退していたマッカーサーを現役に復帰させ、少将から中将へと格上げさせた。大統領は、彼を米極東陸軍司令官に任命するほかないとの陸軍参謀総長ジョージ・マーシャル（George C. Marshall）大将の提案を受け入れざるをえなかったのである。そして、ルーズベルトはフィリピン陸軍を正規の米陸軍に編入させる行政命令を七月二六日に発令し、これまで別々であったフィリピン駐屯の米陸軍と、マッカーサーが指揮

していたフィリピン・スカウトとを一体化させた。[15]

こうしてマッカーサーは、日米関係の急速な悪化によって救われたばかりでなく、フィリピン情勢が劇的な変貌を遂げることで、再びアメリカ本国や世界から脚光を浴びる機会を得ることとなった。すでに六一歳に達していたものの、マッカーサーはさぞ溜飲を下げ、自尊心を高めたことであろう。以降、彼は自分に与えられた大きな使命を達成しようと自己を奮い立たせていくのである。

(1) 太平洋戦争研究会編『図説マッカーサー』(河出書房新社、二〇〇三年)一四〜一五頁、一四八頁参照。

(2) 同上書一六〜一八頁参照。前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』一四四〜一四五頁参照。前掲書『マッカーサーの時代』一五〜二六頁参照。

(3) 正式名はメリー・ピンクニー・マッカーサー(Mary "Pinkie" MacArthur)、ピンキーという愛称で呼ばれた。彼女は貴族的で富裕な綿花商人の娘であり、南北戦争時に兄や親類が南軍に加わって戦った軍人一家であった。夫アーサーとの間でアーサー三世、マルコム、ダグラスの三男児を産んだが、次男は幼少時に死去、長男は四〇代半ばに海軍大佐で病死したため、彼女は三男のダグラスに愛情を注いだ。ダグラスの士官学校時代には近くのアパートに住み着くなど、ダグラスへの愛情のエピソードには事欠かない。マッカーサーは精神面では父親よりもこの母親から多大な影響を受けたと思われる。彼女は後述のとおり、一九三五(昭和一〇)年にマッカーサーに同伴してマニラへ出向くが、その直後の一二月に脳血栓のため死去、のちに故郷のバージニア州ノーフォークに埋葬された。

(4) *Ibid., MacArthur and Wainwright*, p.2.

(5) 前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』一四五頁、一五六頁参照。

(6) 前掲書『図説マッカーサー』一九〜二〇頁、前掲書『マッカーサーの時代』四二頁参照。

(7) 当時シアーズ・ローバックの会長であったロバート・ウッドはウエストポイントの同期生で、反ニューディールのリーダーとしてマッカーサーを庇護した。——前掲書『マッカーサーの時代』四一頁より。またマッカーサーの副官アイゼンハワーは、「マッカーサーとルーズベルトとの蜜月が終わると自分の立場が悪くなり、ルーズベルトはマ

ッカーサーをフィリピンに止まらせるように手配した」と証言している。――Robert H. Ferrell ed., *The Eisenhower Diaries*, 1981, p.7. 前掲書『ダグラス・マッカーサー（上）』一五八～一六〇頁、一六七頁参照。

（8）前掲書『マッカーサーの時代』三〇～四二頁、四九～五〇頁参照。

（9）一八九八（明治三一）年、テネシー州ナッシュビルに誕生。幼少時に両親の離婚により同州のマールフリーズボロの祖父宅で母と二人の兄弟とともに成長する。父は裕福な製粉所の経営者であった。母方の実家はテネシー州の政界では知られた存在で、祖父は南部連合の退役軍人たちの指導者であった。マッカーサーの副官となるハフによれば、ジーンは南北戦争や米西戦争で戦った親戚の話を聞いて育ち、「町でもっとも愛国心の強い少女」といわれるほど軍人を敬愛していた。遺産を得たジーンは、三七歳のときに上海の友人を訪ねるためフーバー号に乗船していたが、船長が彼女をマッカーサーとその従妹メアリー・マッカーサーに紹介し、メアリーがジーンを気に入ったことから、ジーンはこの一行と親しくなった。彼女はマニラに立ち寄るようにとのマッカーサーの誘いに応じ、下船後はマニラホテル内に居を定めた。二人は一九三七年四月、ニューヨークで挙式、翌三八年に息子アーサーが誕生した。ジーン夫人は家庭を築くことに献身し、将軍の妻であることをひけらかすこともなく、誠実で飾らない人柄で夫を支えた賢夫人との評価が高い。二〇〇〇（平成一二）年一月、一〇一歳で死去した。その遺体は夫の眠るノーフォークのマッカーサー記念館に葬られている。

（10）*Ibid., MacArthur and Wainwright*, p.3.

（11）Admiral Charles Bulkeley, 10/5/1982 in Washington.

（12）Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.

（13）前掲書『マッカーサーの時代』五二～五三頁参照。

（14）同上書五一～五二頁、五六頁、六三頁参照。

（15）*Ibid., MacArthur and Wainwright*, p.4.

(2) バターンボーイズの誕生

では視点をマッカーサーからバターンボーイズへと移そう。まずバターンボーイズの誕生過程を明らかにしたい。すでに触れたとおり、バターンボーイズとは一九四二(昭和一七)年三月一一日夜にコレヒドール島とバターン半島南部から脱出した一五名の陸軍将兵を指す。彼らは階級や役職、また着任の経緯から大きく二つのグループに分類できる。

まず上層部を形成する第一グループは、サザーランド少将、マーシャル准将、ケーシー准将、エーキン准将、マーカット准将、ジョージ准将、スティバース大佐、ウイロビー大佐の八名であり、脱出に成功した直後にオーストラリアで事故死したジョージを除き、すべてマッカーサーの側近として重要な役割を分担する要人達である。

これに対して中下層部を形成する第二グループは、ディラー中佐、ウイルソン中佐、ハフ中佐、シャー中佐、モアハウス少佐、マクミッキング大尉、ロジャーズ軍曹の七名である。彼らはマッカーサーの副官として公的ないし私的な役割(たとえばマッカーサーの家族の世話など)を担ったか、あるいは第一グループの主要人物の補佐役を担った。なおシャーも第二次大戦の最中に飛行機事故で亡くなっている。

全員の詳細な軍歴と着任経緯についての情報には限界があるものの、現時点で把握できるデータに基づいて各人のプロフィールを素描する。なお各人の年齢は日米開戦時点のものである。

1　上層グループ

〔1〕　リチャード・サザーランド

サザーランド少将(のち中将)は、マッカーサーの側近中の側近として最重要人物と見なされる。彼は一九三八(昭和一三)年に中国の天津に部隊とともに駐屯していた折、マッカーサーに請われてフィリピンへ転任した。オードが飛行機事故で亡くなったため、その後任として着任したと推測できる。しかし翌三九(同一四)年末に

誰からも好かれていたアイゼンハワー中佐が、マッカーサーの説得を振り切って帰国したため、サザーランドはアイゼンハワーに代わってフィリピン連邦政府の軍事顧問部参謀長となった。一説には、野心的なサザーランドがアイゼンハワーに取って代わろうとしたため、マッカーサーとアイゼンハワーの間に冷たい感情が生まれたともいわれる。[1] そしてマッカーサーが一九四一（同一六）年七月に現役に復帰し、米極東陸軍司令官に任命された際、そのまま参謀長（大佐）に就任した。当時四八歳であり、マッカーサーより一三歳年少であった。

彼はマッカーサーの下で米比両軍の発展と強化に尽力し、日米開戦後はコレヒドール島を拠点として日本軍の猛攻に抗戦したものの、マッカーサーとともにオーストラリアへ逃亡した。以降、対日戦の最前線にあってマッカーサーを支え続け、東京湾内の戦艦ミズーリ号上での降伏式典ではマッカーサーの傍らに立った。このように常時マッカーサー軍の総括指揮面で卓越した能力を発揮し、マッカーサーの片腕となったのがサザーランドであった。それゆえ、彼がバターンボーイズの筆頭に挙げられる。

サザーランドの軍歴は次のとおりである。一八九三（明治二六）年一一月にメリーランド州に生まれ、実父はウエストバージニア州選出の上院議員であった。東部名門のイェール大学に進学後、州兵として徴兵され、第一次大戦期の一九一六（大正五）年に予備役から正規の陸軍少尉に任官した。これは稀なケースであった。翌年大尉へ昇進し、フランス戦線で戦った。戦後、陸軍歩兵学校、指揮幕僚学校、陸軍大学とエリートコースを歩み、陸軍省の作戦訓練部幕僚を経て、一九三七（昭和一二）年に第一五歩兵大隊長となった。翌年に中佐、四一（同一六）年末にはマッカーサー軍の参謀長として大佐から少将へと昇進した。[2]

彼の人柄や性格については毀誉褒貶がある。ウイロビーは次のようにサザーランドを評価している。「彼は厳格かつ禁欲的性格で、この職種ではあまり見られないタイプだ。しかも彼は秘密主義的で孤高の人物で、誰よりも一生懸命働いた。部下から好き嫌いされることに彼は無頓着だった。私は何度か特殊な状況下で、サザーラン

ドと原則的な意見の対立があって衝突したが、それでも彼を信用した。彼の疲れを知らないタフさや問題解決のための対処方法などを信頼していたからだ。彼は有能であり、〔マッカーサー〕将軍の意思を鋭く察知し、それを幕僚会議で完全かつ明確に成立させた。その後に特定の者へ、計画の実施を促すよう手配した。彼は計画能力と実施能力とのコンビネーションをもった理想的な参謀長だった」。

他方、サザーランドへの悪評は、彼がマッカーサーへの面会者を抑制しようとしたことである。それは一面、多忙なマッカーサーを守る配慮でもあったが、半面、自己の権威を強めることを意図していた。多くの者はサザーランドの冷淡な対応に苦慮し、彼は煙たがれる存在となり、ときには敬遠された。とくに最前線で部隊を指揮する第六軍司令官のウォルター・クルーガー(Walter Krueger)少将(のち大将)や第五軍司令官のロバート・アイケルバーガー(Robert L. Eichelberger)少将(のち中将)は、サザーランドを嫌った。この点についてウイロビーは、「参謀長はその置かれた立場上、〝手斧を使う男(hatchet man)〟と呼ばれる。不愉快であろうと、〔マッカーサーからの〕命令を実行する人物だから、誰からも好かれない」と同情する。サザーランドともっとも親しかったマーシャル参謀次長(のち参謀長)は、サザーランドを「華麗であり、いつも輝いていた」し、物事に対して明白で積極的な人物であったと賞賛する一方で、周囲からの批判を友人として忠告すると、「誰かがこのSOB(Son of a Bitch)という悪役をやらねばならない。マッカーサー将軍にはその気はないし、君もまったくそうするつもりはない。それなら私しかいないと思う」と告白したことを明らかにしている。(3)

要するに、サザーランドは参謀長として終始冷徹で、マッカーサーに献身的であった。その忠誠ゆえに、マッカーサーは彼を常時傍らに置き、とくに司令部内の人事面や軍事作戦面のほか、ワシントンとの機密の交信等でもっとも信頼し、有能な相談相手として彼に多くの時間を割いたのである。ただし戦争後期よりサザーランドの女性問題から両者間に密かな齟齬が生じ、彼は日本の降伏から間もない一九四五(同二〇)年末には日本を去る

ことになる。

〔2〕 リチャード・マーシャル

バターンボーイズの第二番目が参謀次長のマーシャル准将（のち少将）である。サザーランドより二歳若い彼は、一九三〇（昭和五）年前後の数カ月、フィリピン米軍の兵站部に主務として在勤した経験があり、新年会の折にマッカーサーと初めて会う機会があった。一九三八（同一三）年に旧知のサザーランドから、マッカーサーが幕僚を求めているとの手紙を受け取り、フィリピン行きを決意した。当時マーシャルはワシントンの陸軍省軍需兵站部の運輸課長職に在ったが、ヨーロッパ大戦勃発直後の一九三九（同一四）年九月にマニラに着任した。兵站を主要任務としつつ、当初はフィリピン軍幹部の訓練も担当した。同年末、参謀長のアイゼンハワーが帰国し、サザーランドがそのポストを埋めると、マーシャルは幕僚部次席に転じ、一九四一（同一六）年七月の米極東陸軍創設時に参謀次長へと就任した。四六歳であった。なおマーシャルは戦争の機運が高まる中で家族を本国へ帰国させており、フィリピンに留まるか、帰国するかの選択を迫られ、結局残留を決めたのである。まもなく彼は中佐から大佐へと昇格した。

マーシャルの軍歴は次のとおりである。一八九五（明治二八）年六月、バージニア州に生まれ、バージニア軍学校（VMI）卒業後、兵站学校、陸軍大学に進んだ。この間、第一次大戦期にサザーランドと同じく第一師団に配属となり、以来彼と親交を深めた。ほぼ二〇年間、兵站部門を専門としたが、上記のとおり、一九三九（昭和一四）年以降、マッカーサー総司令部では一貫して参謀次長を務めて、サザーランドを補佐した。彼の不在時には参謀長代理を務めた。日本占領初期の一九四五（同二〇）年末にサザーランドが退任し、その後任として参謀長に昇格したが、まもなく母校のバージニア軍学校の校長に転じることとなり、翌一九四六（同二一）年五月

に日本を去った。[4]

その人柄について日本占領期の民政局（GS）局長コートニー・ホイットニー（Courtney Whitney）少将は、「性格上、マーシャルはサザーランドほど積極的ではなく、権威があるわけではなかった。会議の進め方とか妥協の方法とかでは、無愛想に実施方針を決めた。それは彼の性格であった」と証言している。要するに、彼はサザーランドのような優れた指導力はなかったものの、独断専行することもなく、真面目に規則を遵守しながら周囲をまとめていく温厚な調整型人間であったため、司令部内ではほとんど敵対する者がいなかった。[5]

〔3〕ヒュー・ケーシー

ケーシー准将（のち少将）は、進軍に際して不可欠な道路や橋の建設、また飛行場の設営などを行う土木・技術部門の総括責任者であった。その仕事ぶりは定評があり、マッカーサーから厚い信頼を得ていた。またマッカーサーと個人的にもっとも親しかったといわれ、会議や食事の際にマッカーサーの傍らに席を占めることが多かった。ケーシーがバターンボーイズに選抜されたのは、このような理由からであり、実績上、サザーランド、マーシャルに次ぐ第三番目に位置づけられよう。

彼の軍歴は次のとおりである。一八九八（明治三一）年七月、ニューヨーク市ブルックリンに生まれた。父は鉛管工で早世したため苦学したが、成績優秀のため、わずか一六歳でウエストポイント陸軍士官学校に入学した。第一次大戦のために卒業を切り上げ、陸軍技術部隊に配属され、以後ほぼ一貫して技術部門を歩んだ。とくに港湾と河川の専門家として知られ、民間でも重要な業務をこなしたほか、ドイツ留学時には博士号を授与されるほどのインテリであった。一九三七（昭和一二）年九月に当時の軍事顧問であったマッカーサーの要請で、フィリピン連邦政府の水力発電と治水の事業を完了させ、マッカーサーとケソンから高い評価を得た。それから三年を

経た一九四〇（同一五）年末にワシントンに戻り、補給総監部建設局の設計技術課長職に在ったが、日米開戦前夜の一九四一（同一六）年一〇月、マッカーサーの強い要請を受けてフィリピン米軍の技術部長に帰任した。マーシャルより三歳年少の四三歳で、当時は大佐であった。

アイルランド系のケーシー（通称パット）は、バターン戦では常に前線に在って技術面を指揮していた。日米開戦直後、マッカーサーがマニラを放棄してバターン半島に逃げ込む際、ダイナマイト（〝ケーシー・ダイナマイト〟といわれた）を用いて主要な幹線道路と橋梁の爆破を担当したのがケーシー率いる工作部隊であった。同部隊はまた第一次バターン攻防戦では日本の戦車を爆破する装置（〝ケーシーの棺桶〟と呼ばれた）を多用して日本軍を苦しめた。他面、マッカーサーが「ジャングルに道路を作れ」と命じたとき、「それは無理です」と言って阻止するなど、単なるマッカーサーのイエスマンではなく、むしろ彼に物怖じせずに直言できる稀有な人物であった。マッカーサーは裏表なく率直な物言いをするケーシーを大切にした。またケーシーは理数系のエンジニア出身として理論家的な発想や主張をする点がマッカーサーに好感を寄せられた原因でもあったろう。なおＰＴボートによるコレヒドール島脱出過程において、第二日目の朝、ケーシーの搭乗艇がマッカーサー搭乗の第四三号艇を日本の艦艇と間違えて攻撃を開始しようとした際、それをケーシーらが間一髪で止めたとの実話がある。両者の浅からぬ因縁を感じさせる。

オーストラリアへの退避以降、ケーシーは彼の技術部隊を統率して対日戦で数々の勲功を上げた。そして日本の降伏直後には、廃墟と化した東京をいち早く視察する危険な仕事を請け負うなど、マッカーサー本隊のさきがけ役を果した。いかにマッカーサーの彼への信頼が厚かったかを物語っている。占領期、約四年間にわたり米極東陸軍および極東軍の技術部長を務めた後、一九四九（昭和二四）年七月、惜しまれつつマッカーサーの下を去り、同年末に陸軍を退役した。マッカーサーとの付き合いは八年もの長きに及んだ。(6)

〔4〕スペンサー・エーキン

エーキン准将(のち少将)は、暗号を含む通信部門の総括責任者であった。とくにエーキン率いるチームは、戦時中に苦心の末に日本軍の暗号を完全に解読し、マッカーサー軍の勝利に大きく貢献した。その意味で、同チームはマッカーサーの〝秘密兵器〟といわれた。彼は日米開戦後の第一次バターン戦で前線に出ることを要望したが、サザーランドから「君は重要な仕事をしているのだから」と説得され、やむなく後方で日本軍の交信傍受や暗号の解析に精力を注いだ。またラジオ・プログラムにも関与し、「自由の声(Voice of Freedom)」を世界に向けて日に三回放送させて、米軍とフィリピン人の士気を鼓舞する役割を果たした。このような理由から、エーキンはバターンボーイズに選抜されたのである。

彼は一八八九(明治二二)年二月、バージニア州のパーセルビルで生まれた。一九一〇(同二三)年にバージニアの陸軍学校を卒業後、歩兵将校として各地に勤務し、第一次大戦にも参戦した。その後、上級歩兵学校、航空学校、指揮参謀学校、陸軍大学に在学したが、暗号を含む通信部門に入った経緯などは、その機密性のためか定かではない。またマッカーサー軍への配属の経緯なども不詳である。バターンボーイズの中では最年長の五二歳であり、その人柄は地味ながらも好評であり、後述するウイロビーとの関係を除けば、司令部内での人間関係は誰とも良好であった。

エーキンの活躍は、むしろバターン脱出以降にあった。脱出後、オーストラリアに日本軍の暗号解読本部を設置し、暗号解読に全力を傾注する一方、様々なアイディアを生かして、前線での各作戦では強いリーダーシップを発揮した。たとえば、日本側が発信するラジオ・メッセージを傍受するための中継基地を開拓し、日本軍が実施を予定している爆撃攻撃の目標に関する情報を事前に摑むと、直ちに自軍がその爆撃攻撃を予防ないし反撃で

きるようにその情報を前線指揮官へ緊急伝達した。その結果、米陸軍の航空部隊は多くの敵機を迎撃ないし撃墜できた。しかもエーキンの機密情報は、陸軍内に止まらず、ウイリアム・ハルゼー（William F. Halsey Jr.）提督率いる第三艦隊の情報部へも提供されるなど、ともすれば険悪となりがちな陸海軍間を協調させるほどの貢献も果たした。情報戦こそが戦争の帰趨を握ることをエーキンは熟知していたからである。

一九四三（昭和一八）年三月、ついにエーキン・チームは日本軍の暗号の完全な解読に成功し、以後、日本軍の動向について非常に価値ある情報を次々ともたらすこととなった。とくに翌四四（同一九）年春、ニューギニアの要地ホーランディアでの水陸〝蛙飛び〟作戦にも、このチームの貴重な情報が大いに活かされた。ただし同じく情報部門を担当する参謀第二部（G2）のウイロビーとの関係は悪化していく。それはウイロビーが暗号解読に必要な資料を必要時にエーキン側へ回さなかったからであった。またエーキンも精度の高い情報をG2を介さず、直接マッカーサーに伝達したため、ウイロビーはそれを疎ましく感じたからでもあった。両者の対立は、マッカーサーの下で功名争いが主要因でもあった。

日本降伏後、エーキンはマッカーサーに随伴して厚木に到着し、その後、連合国最高司令官総司令部（後GHQ／SCAP）の民間通信局（CCS）局長に就任した。そして約一年半後の一九四七（同二二）年三月に離任、本国に帰国した。同年少将となり、陸軍の通信局長として対日軍事占領問題に関与し、一九五一（同二六）年に退役した。(7)

〔5〕 ウイリアム・マーカット

マーカット准将（のち少将）は沿岸砲兵隊の責任者であったが、その経歴には不明な点が多い。マッカーサー軍内の特別任務を帯びていたためと思われるが、それがどのような任務であったのかは現在も依然、機密事項と

なっている。彼がバターンボーイズに選抜されたのは、対空砲兵隊部門の責任者であったこと以外に、そのような特殊な理由があったからであると推測される。

マーカットの軍歴は次のとおりである。一八九四（明治二七）年三月、モンタナ州のセントルイス生まれ。ワシントン州シアトルの私立高等学校を卒業後、一九一三～一七（大正二～六）年に新聞記者を務めたのち、第一次大戦時に沿岸砲部隊に入隊して陸軍少尉となった。大戦後の数年間、『シアトル・タイムズ』の自動車担当編集長となるが、一九二〇（同九）年に陸軍大尉、沿岸砲学校、指揮幕僚学校を経て、一九三八（昭和一三）年にマッカーサー軍の幕僚としてマニラに赴任し、対空砲部門の長に任命された（少佐）[8]。日米開戦時には、サザーランドより一歳年少の四六歳で、准将へと昇格していた。バターン攻防戦を経てマッカーサーとともにオーストラリアへ逃亡後、ニューギニア、ビスマルク諸島、アーキペラゴ、フィリピンの各戦闘を通じて少将へと昇進した。この間における彼の動向については、地味な性格も影響したと思われるが、周囲の者からあまり語られていない。

マーカットは日本降伏直後にマッカーサーとともに来日し、新設された連合国四カ国（米・ソ・英・中）による「対日理事会（ACJ）」では、マッカーサー代理として、短期間ながらアメリカ代表を務めた。その一方で、一九四五（同二〇）年末、総司令部（GHQ）で最大の組織を誇った経済科学局（ESS）の二代目局長に就任した。初代局長のレイモンド・クレーマー（Raymond Kramer）大佐が就任後わずか三カ月で帰国したためである。経済政策には精通していなかったため、彼はシャーウッド・ファイン（Sherwood Fine）局長顧問ら経済専門家にそれをほとんど任せる傾向があった。ファインはマーカットについて、「繊細で思慮深くて、典型的な軍人タイプとはほど遠い人物だったと思います。陸軍士官学校の出身ではないせいか、他の職業軍人たちとは一味違っていました。……将校になって何年もしてから指揮・幕僚学校へ行きましたが、みんなからよそ者のように見ら

れました」と証言している。[9] バターンボーイズでありながら、サークル内では孤立していた様子が窺える。またマーカットの副官を務めた日系二世のキャピー・ハラダ（Cappy Harada）中尉によれば、彼はマッカーサーへの忠誠心に厚く、マッカーサーの勤務中は絶対に帰宅しないなど徹底した献身ぶりであった。他面、大変な野球好きで、野球の話になると機嫌が直るとの一面もあったという。[10]

マーカットは、マッカーサー解任以後もＥＳＳ局長の地位を去ることなく、占領終了時まで六年半もの長期間、同局長を務めた。これはバターンボーイズとしては最長記録であり、彼は最後のバターンボーイとなった。ただし、マーカットはこの局長の地位よりも〝Ｍ資金〟の方で日本国内では有名となっている。Ｍ資金になぜ彼の名前が冠せられたのか、その実態とはどのようなものであったのか、そもそもＭ資金が存在したのか否かも依然謎のままである。マーカットは本国に帰国後、陸軍省民事政府事務局（ＯＣＡＭＧ）に務めたのちに退役している。[11] ウイロビーがＧ２退任後、求職しても再就職できなかった事実と比較すれば、マーカットへのアメリカ政府の優遇ぶりが注目されよう。

〔6〕 ハロルド・ジョージ

ジョージ准将は、マッカーサーの下で陸軍航空部隊の統括責任者となった人物であった。日米開戦時、日本軍の奇襲攻撃によってフィリピン最大の航空基地クラークフィールド（飛行場）の米軍機がほぼ全滅し、ワシントンから派遣されたばかりの陸軍航空部隊司令官のルイス・ブリアトン（Lewis H. Brereton）少将が短期間でマニラを去ると、ジョージはマッカーサーからその後任者に任命された。すでに彼はマッカーサーに対して空軍部門全般にわたる幅広い情報や知識を提供しており、マッカーサーから厚い信頼を得ていた。実際、日米開戦以前にフィリピンへ最新鋭の爆撃機Ｂ17を配備させることができたのは、ジョージが尽力した結果であるといわれてい

る。

ジョージの軍歴は次のとおりである。一八九二（明治二五）年九月、ニューヨーク州ロックポートに生まれた。陸軍入隊後、ニューヨーク州兵の二等兵となり、第一次大戦時の一九一七（大正六）年に陸軍航空隊に配属された。そして空軍戦術学校の指揮・幕僚学校を卒業後、小柄な彼は戦闘パイロットとなり、〝空の勇士（air ace）〟として「特別飛行勲章」を授与された。その後フィリピンで陸軍の空軍部隊を指揮し、日米開戦後は粘り強い戦闘でもっとも卓越した軍人の一人として称賛された。彼は最下級の兵卒から出発したにもかかわらず、准将まで躍進した実力者であった。その人柄についてマーシャルは、「表面は大雑把に見えたが、実は心が温かく、皆彼を知れば気が合うような好人物で、無数の友人がいた」と賞賛し、マッカーサー自身も、ジョージを非常に好んだ。彼ともっとも親密であったケーシーは、ジョージについて「彼は非常に実直で活発な人物であり、バターンで戦っていた当時、米軍パイロットを中国へと送り込む計画を立てた」という。このような積極的な性格とともに、空軍を統括する立場から、ジョージはバターンボーイズの一人に指名されたのである。当時四九歳であった。

ところがコレヒドール島から脱出後、オーストラリア到着から間もない一九四二（昭和一七）年四月、パラシュート訓練機が彼の搭乗していた飛行機に衝突し、一命を落としたのである。彼の葬儀は盛大に執り行われ、マッカーサー夫妻も参列した。これは戦争中マッカーサーが参列した唯一の葬式であった。いかにマッカーサーがジョージの死を悼んだかを物語るエピソードである。その後、イリノイ州ローレンスビルで彼を記念した飛行場、ジョージフィールドの開設記念セレモニーが行われ、この式典には約二万五〇〇〇人が集まった。同飛行場は翌一九四三（同一八）年一月に完成し、今日に至っている。(12)

〔7〕チャールズ・スティバース

スティバース大佐（のち少将）は、本来参謀第一部（G1）の人事担当幕僚であり、サザーランド参謀長の補佐的役割を担った人物である。多くの関係者が「サザーランドの実務の大半は彼が請け負っていた」と証言するように、スティバースはサザーランドの片腕的存在であった。しかも敵の多かったサザーランドとは対照的に、温和な人柄で調整能力があったため、サザーランドの人間的欠陥を補っていたともいえる。マーシャル参謀次長は、スティバースについて「いつも静かな人物だった。めったに話をしなかったが、しっかり研究していた。マッカーサー将軍は彼をコレヒドール島から連れて行った。彼はどこにいっても詳細な人事を配する点で最善の人物であるとマッカーサーが考えたためだ」と証言している。そのような意味から、彼はバターンボーイズの一員に加えられたのである。当時五〇歳であった。

スティバースの軍歴は次のとおりである。一八九一（明治二四）年一〇月、イリノイ州に生まれ、ウイスコンシン州の大学卒業後、一九一六（大正五）年、陸軍に入隊、第一次大戦終結後、少佐となった。歩兵学校上級コース、指揮・幕僚学校へと進み、一九三六（昭和二）年にイリノイ州DSM（OLC）SSAWCを修了したのち、マニラのマッカーサー軍に配属となり、サザーランドの下で人事担当幕僚に任命された。参謀第二部（G2）のウイロビーは、「スティバースは感じが良く、楽天的で、控えめだった。彼は陽気でも威勢がいいわけでもなく、また酒飲みでもなく、静かにわが道を行くタイプだった。日本の降伏以前に健康の問題だったと思うが、彼は本国へ帰国した」と証言するとおり、戦争終結時の一九四五（昭和二〇）年一二月に大佐で退役し、翌四六（同二一）年九月に少将の地位で終わっている。帰国後の消息は不明であり、もっとも知られていない人物である。[13]

〔8〕チャールズ・ウイロビー

ウイロビー大佐(のち少将)は、情報部門の参謀第二部(G2)で一貫して責任者を務めた人物である。彼はフィリピン時代にはサザーランドやマーシャルほどの地位と権威を得ていなかったものの、日本占領期に入るとGHQ内で俄然影響力を拡大し、民政局(GS)局長のホイットニーと権勢を二分するほどの絶大な力をもつことになる。そして一九五一(昭和二六)年四月のマッカーサー解任に殉じて日本を去るまで、マッカーサーの傍に在った。その意味では、サザーランドとマーシャルが日本を去って以後、バターンボーイズ残留組の筆頭格となった人物である。

しかしウイロビーはその生い立ちなど、このサークル内では異色であった。一八九一(明治二四)年、ドイツのハイデルベルグでプロイセン男爵の父とアメリカ人の母の間で生まれ、一九歳のときに母方の姓を継ぎ、アメリカに帰化した。ゲティスバーグ大学卒業後、カンサス大学大学院へと進学。以後陸軍に入り、第一次大戦時に少尉となり、フランス戦線に加わった。一九二一(大正一〇)年から一〇年間、南米で広範な情報活動を行ったのち、一九三四〜三五(昭和九〜一〇)年に指揮幕僚学校の教官となった。ウイロビーによれば、マッカーサーが陸軍参謀総長として同学校を視察した際、地図やスライドなど視覚に訴えるウイロビーの軍事史の講義に興味を抱き、「君に(将来の)チャンスをあげよう」と声をかけてくれたという。ウイロビーはこれを生涯の誇りとし、自ら求職活動を行い、一九三九(同一四)年にマニラに着任した。

ただし当初はフィリピン米陸軍の兵站部(G4)に配属され、ジョージ・グルナート(George Grunert)司令官の下でバターン半島の防衛線強化に関与した。二年後の一九四一(同一六)年七月に米極東陸軍が創設され、司令官がグルナートからマッカーサーへと交代すると、彼は念願のG2へ移動となった。時に五〇歳。以来、一九五一(同二六)年まで丸一〇年間、ウイロビーはマッカーサー専属の情報部長として彼の側近の座を占め、絶

大な権限を握るのである。[14]

かつて指揮・幕僚学校の受講生であったマーシャル参謀次長は、「将軍〔ウイロビー〕は私がこれまで会った人物の中でもっとも偉大な歴史の学究者であり、きわめて知識が豊富で、自制的で威厳があり、格式ばった人物だった」と賞賛するが、[15] これは総司令部内では少数派の見解といえる。大方のウイロビー評には、「変人で通っており、プリマドンナのような話し方をすると言われていた。サザーランドとはあまりうまくいかなかった。他の人から友人とは思われておらず、敵も多かった。彼は占領期の日本で様々な不思議な出来事に巻き込まれているが、諜報機関関連の資料がなく、彼がやっていた機密任務については誰も知らない」との悪評が付きまとう。[16] 事実、マッカーサー解任後、彼は帰国して中央情報局（CIA）の仕事に就こうとしたが、事実上拒否された。スペインのフランコ総統などとも親交があり、マッカーサーが〝リトル・ファシスト〟と呼んだことはあまりにも有名である。

占領前半期、彼はホイットニーやケーディスら民政局（GS）が推進する、ポツダム宣言に即した日本の「非軍事化・民主化」路線を厳しく批判し、またGSと激しく対立したが、冷戦が深刻化する過程でアメリカ政府の占領政策が日本の「経済的自立化」路線へと転換すると、反共主義を掲げるウイロビーは吉田茂首相との提携を強め、日本の内政に対して大きな影響力を発揮するなど、日本で広く知られるバターンボーイズの一人でもあった。

2　中下層グループ

〔9〕　フランシス・ウイルソン

ウイルソン中佐（のち大佐）は、マッカーサーおよびサザーランドの専属副官であった。バターンボーイズに

選ばれたのは、主としてこの理由による。彼は一八九四（明治二七）年にバージニア州ノーフォークに生まれた。ジョンズ・ホプキンス大学在学中に陸軍への関心を深めて入隊し、歩兵師団に配属された。第一次大戦時はメキシコ国境の軍務に就いた。そして日本軍によるパールハーバー攻撃の直前にマニラに向けて出航し、着任後、マッカーサーの副官に任命され、サザーランドにも仕えた。日米開戦後のクリスマスイブにはマッカーサーとともにマニラからコレヒドール島へ移動し、その後オーストラリアへと脱出した。マッカーサーおよびサザーランドの副官業務ののち、一九四四（昭和一九）年以降、ブリスベーンの士官候補生学校勤務を経て、シドニーでの米軍資産歳出部門の仕事に従事した。日本の敗戦、そして占領期を迎えると再びマッカーサーの幕僚に任命されたほか、GHQの歴史部門の長に就任した。一九四八年に海外での七年間の勤務を終えて帰国し、アラバマ州兵の指揮官に選ばれた。一九五三（同二八）年に大佐で退役、その後歴史学を修得して、高校の教師となった変り種である。[17]

〔10〕 レグランデ・ディラー

ディラー中佐（のち准将）はマッカーサーの副官として、また広報担当者として辣腕を振るった。マッカーサーがフィリピンや本国のみならず、世界中から注目された一因は、マッカーサーの指示の下にディラーが巧みに操作した情報管理にあるといわれている。そのような有用性が彼をバターン・ボーイズとさせたゆえんであった。

一九三〇年代からフィリピンに滞在していたディラーは、一九四一（昭和一六）年七月に初めてマッカーサーに面会した際、「君は一九二四（大正一三）年にシラキュース大学を卒業したね。同年のウエストポイントのクラスは私を学長にしてくれるほど親切で名誉あるクラスだから、君と私はクラスメートだ」と声をかけられ、副官になるよう求められた。一時躊躇しながらも承諾すると、マッカーサーはディラーの手を握り、目を見て、「君

は今や私の家族の一員だ」と語りかけたという。恐らくマッカーサーは彼のフィリピンでの実績を買ったものであろうが、マッカーサーの人心収攬の術の一端を垣間見せる話である。

以降、ディラーはマッカーサーの献身的な専属副官となり、とくに広報面を担当した。彼が細心の注意を払ったのはマッカーサーの名誉やイメージに傷がつかないことであり、この観点から、マッカーサーに関する不利な報道が流れないよう、内部から不用意な情報や噂が外部へと漏れないよう最大限の努力をした。同時にディラーは密かにマッカーサーの私有財産を管理していた。要するに、マッカーサーの広報係と財務係を兼ねた秘書官であった。彼は太平洋戦争を通じて広報面でその力量を発揮し、マッカーサーを英雄視する世論や風評の形成に一役買った。そして終戦時におけるミズーリ号上の日本降伏式典にはマッカーサーに従って参列した。その直後に副官から軍事秘書となり、一九四七（昭和二二）年六月まで務めた。以後帰国し、准将として退任した。(18)

〔11〕　シドニー・ハフ

ハフ中佐は一九三五（昭和一〇）年一〇月当時、アジア艦隊所属の駆逐艦に乗船する海軍少尉としてフィリピンに勤務しており、フィリピンに到着直後のマッカーサーに面会する機会があった。マッカーサーは高速魚雷艇（彼は〝PTボート〟と呼ばずに〝Qボート〟と呼んだという）に詳しいハフの説明に興味を抱き、同ボートをイギリスからフィリピンへ導入する相談をもちかけたという。ところがハフはサザーランドと一緒のゴルフ中に心臓麻痺を起こして帰国し、海軍を退任するにいたった。するとマッカーサーは、退任したハフを今度は陸軍士官としてマニラへと呼び戻し、彼はマッカーサーの専属副官として、フィリピン防衛に不可欠なPTボート艇隊建設の構想をまとめた。マッカーサーがいかにPTボートに執心していたかを示すエピソードであるが、実際この努力と先見性が、あのPTボートを使用した劇的なバターン脱出をもたらし、マッカーサー自身の命ばかりか、そ

の家族とバターンボーイズすべてを救うことになるわけである。

なおハフは、マッカーサー家のジーン夫人と息子アーサーの世話係も命じられていた。彼の人柄や容貌がジーンの眼鏡に適って、彼女に慕われたからである。以上のような理由で、彼はバターンボーイズの一員に選ばれたのである。

バターン脱出後、ハフは一九四四(同一九)年にオーストラリア女性と結婚するが、その前後、パーティ等での華やかな女性関係が災いしてジーン夫人から疎まれ、結局マッカーサーの専属副官から外された。日本占領開始直後にハフはマッカーサーに帰国を申し出たが、慰留されてマッカーサーの専属副官へと戻り、以降、マッカーサー解任までその地位にあった。そしてマッカーサーが解任されると共に帰国し、一九五四(同二九)年に請われて再び専属副官になり、一九六三(同三八)年に亡くなるまで、マッカーサーの身辺を守った人物であった。[19]

〔12〕ジョセフ・シャー

シャー中佐(のち大佐)は、米陸軍の最高機密である日本軍の暗号解読に専念した人物である。彼は一九三〇年代中期以降、日本の暗号機であるパープル・マシーンの解読作業を極秘に開始しており、最終的には太平洋戦争の最中に海軍とも協力してその解読に成功した。そのような国家機密に関与していたため、彼の個人情報は今なお非公開となっている。彼がバターンボーイズの一員に選ばれたのは、そうした特殊技能の持ち主であったことに加えて、もし彼が日本軍に捕まれば暗号解読の実態がすべて明らかとなるなど自軍にとってきわめて損失となり、逆に日本軍にとっては大変有益となるからであった。

バターンから退避する際、シャーは暗号解読のための機械装置一式をオーストラリアへと運び込み、上司であるエーキン准将の中央事務所にそれを設置して、自らの極秘の使命を継続した。こうして一九四三(昭和一八)

年、マーシャル諸島でついに日本軍の暗号解読を完成させた。しかし同年八月、シャーはインドにおいて飛行機事故で死去した。軍事機密により彼の死は公表されず、テネシー州の家族だけに知らされた。なお葬儀にはその妻とサザーランド参謀長が参列しただけであった。[20]

〔13〕 チャールズ・モアハウス

モアハウス少佐（のち中佐）は軍医であり、事実上、マッカーサー家の専属医であった。彼がバターンボーイズに選ばれた理由は、マッカーサーの妻ジーンや幼少の息子アーサーがＰＴボートで逃避する間、医師を必要としたからである。

彼は一九〇二（明治三五）年三月、ニューヨーク州に生まれ、大学の医学部を卒業後、大学院修士課程を経て、一九二八（昭和三）年に第二一師団に所属後、ブラウン大学で医学博士号を取得した。その後も上級医学学校へと進学するなど、終始軍医の道を歩んだ。マニラ赴任の時期と経緯は不明であるが、バターンでの勤務の際、ケーシーおよびエーキンと親交があったことがきっかけで、マッカーサーの医務担当の専属副官に抜擢され、側近の一人となったと思われる。ただしジーン夫人は、一九四二（同一七）年三月のコレヒドール島脱出時に初めてモアハウスと会ったと証言しており、あくまでマッカーサー一家の専属医師という役割を急遽担わされたと思われる。

一九四三（同一八）年から四四（同一九）年初頭にかけて、彼は一時帰国した際に「マッカーサーは政治には興味を持っていない」、つまり大統領になる意思がないと講演したが、それはマッカーサーの真意を正しく伝えていたのではなく、むしろ逆であった。このため、サザーランド参謀長によって、彼は副官の地位を追われた。一九四四年にオーストラリア大佐となり、戦後の四七（同二二）年にはハーバード大学で博士号を取得、翌四八

(同二三)年にはアメリカ本国の中佐となった。[21]

〔14〕ジョセフ・マクミッキング

マクミッキング大尉は、スペイン人とフィリピン人との混血で若いフィリピン陸軍の大尉であった。現地の上流家庭の出身であるため、フィリピンの主要家族と交流があり、人脈が豊富であった。その意味で、彼はマッカーサーやサザーランドにフィリピン社会との仲介役として重要視された。彼が唯一フィリピン人としてバターンボーイズに加えられたのは、このような理由からであった。ジーン夫人は、「マクミッキングはスペイン人で、フィリピンに住んでおり、ロムロ将軍に似ていた。将軍が彼を陸軍に入れ、将軍の幕僚にした。サザーランド将軍の下で直接働いた。サザーランドが彼をボートに乗せるように言った。彼は家族(母親と二人の妹)を日本軍によって殺されているので、自分も殺されるだろうからと言って。彼はマニラでビジネスをしていた。彼と妻は私たちと親しい友人であった」と証言している。

しかしマクミッキングは戦時中に何らかの原因でサザーランドと衝突したため、一九四三(昭和一八)年にG2の諜報機関の職務を解任されて、総務的な仕事のポジションへと左遷された。ようやく一九四五(同二〇)年にフィリピンに凱旋してマニラに戻ったものの、家族全員が日本軍によって殺害されている事実を知りショックを受けた。彼は戦後マニラで録音テープ製造会社を興し、事業家としては大成した。[22]

〔15〕ポール・ロジャーズ

ロジャーズ軍曹(のち中尉)は、サザーランドの専属秘書官であり、のちにはマッカーサーの秘書官も兼ねた人物であった。彼は一九二〇(大正九)年に中西部で生まれ、ミズーリ州ウイリアム・ジェウェル大学在学中に

陸軍に入隊し、日米開戦直前の一九四一（昭和一六）年一〇月、米極東陸軍の兵卒としてマニラに到着した。直ちにその優れた速記能力が認められ、サザーランド参謀長の速記者兼タイピストに任命された。彼はサザーランドにとって不可欠な人物としてバターンボーイズに選ばれた唯一の下士官であった。当時二二歳で、最年少でもあった。

バターンからオーストラリアへ退避したのちも、ロジャーズは以前同様にサザーランド専用の速記者兼タイピストとしての職務を続けた。重要なメッセージはもとより、現地と本国の間の極秘の交信もタイプしていたため、彼はすべての局面にほぼ精通していた。マッカーサー、サザーランド間の確執をも熟知するようになり、それが一因で彼はノイローゼに陥った。しかもフィリピンに凱旋後、ロジャーズは廃墟と化したマニラを見て罪の意識に苛まれた。コレヒドール島を脱出したのち、残された多くの友人達が捕虜になり、多くの者が命を落としたことを知ったからである。戦後、彼は本国に戻り、博士号を取得し、大学の経済学教授となったが、戦争について語ることはなかった。一時、彼は懇願されて、マッカーサーをモデルとした映画「アメリカン・シーザー」への出演を承諾したものの、その撮影途中で現場を立ち去るといった事態を引き起こした。一九九一（平成三）年にガンで死去したが、自殺説もある。[23]

3　その他

以上のバターンボーイズ一五名に加えて、マッカーサーとともにコレヒドール島を脱出し、オーストラリアまで同行した主要人物がいた。フランシス・ロックウェル（Francis W. Rockwell）海軍少将とジェームズ・レイ（H. James Ray）海軍大佐である。

レイの消息は不明であるが、ロックウェルについては次のことが判明している。彼は日米開戦直前の一九四一

(昭和一六)年一一月にフィリピン沿岸防衛司令官に任命された。開戦直後、日本軍の猛攻撃によりフィリピンの米空軍が潰滅状態に陥り、そのためトーマス・ハート(Thomas C. Hart)少将率いるアジア艦隊は南方へと退避したが、同年一二月下旬に司令部がマニラからコレヒドール島へ移動すると、ロックウェルはフィリピン全海軍の総責任者(第一六海軍区司令官兼任)に任命され、海軍沿岸防衛軍とともにコレヒドール島へ移動し、マッカーサーの指揮下に入った。とくにロックウェルは、レイ参謀長とともに、マッカーサーが関心を示すPTボートを使用した脱出シナリオを作り上げ、目的を達成することに成功してマッカーサーから厚い信頼を獲得した。なおマッカーサーが解任された一九五一(同二六)年時点で、ロックウェルはハワイを拠点とする太平洋艦隊本部勤務となっており、マッカーサー夫妻が東京を発ってオアフ島に立ち寄った際、自己の宿舎を提供している。(24)

もう一人、四隻のPTボート艇隊の指揮官バックリー海軍中尉(のち少将)についても特記する必要があろう。彼はマッカーサーのコレヒドール脱出を成功へと導いた英雄として内外にその名を高からしめた人物であるからである。

一九一一(明治四四)年八月にニューヨークに生まれた彼は、一九四一(昭和一六)年当時(三〇歳)、フロリダ州キーウエストで高速魚雷艇の実験に携わっていた。荒れ狂う海の中で、PTボートが装備する魚雷の性能の向上や魚雷発射誘導装置の改善、また五〇ミリ機関銃等の戦闘能力の向上などを目的とする様々なテストに関与していた。現場の二人の指揮官の中からどちらか一人がフィリピンへ派遣されることとなり、やむなく彼のコレヒドール行きが決まった。フィリピンから帰国してわずか八カ月後のことであり、気乗りしなかったものの、選択の余地はなかった。同年八月、ワシントンへ出向くと、フィリピン米海軍の魚雷艇隊の指揮を命じられると同時に、戦闘態勢を取るよう厳命されたため、タンカーに積み込んだ六隻のPTボートすべてが、マニラ到着まで燃料を満タンにして船上で訓練を行うなど、常時開戦の態勢を保ったという。

バックリーのマニラ到着時、マッカーサーは日本海軍の猛攻撃からフィリピンを防衛する手段として、PTボート二〇〇隻を保有すべきことを強く主張していた。彼はマッカーサーから依頼されて魚雷艇に関するレポートを提出した。彼の下には現有の六隻のPTボートに加え、さらに六隻がハワイから到着する予定であったが、それらは日米開戦時には間に合わなかった。彼はマッカーサーからの要請を受けて、魚雷艇四艇を使ってフィリピン人相手に初歩的訓練を実施した。一方、沿岸防備担当の海軍大佐（レイと思われる）が魚雷艇を攻撃用にも使うよう主張したことから、バックリー率いる艇隊は、ハート、マッカーサー両司令官が見守る中で模擬実験を行い、高速魚雷艇が軽巡洋艦に対して高い攻撃能力をもつことを実証した。以後、PTボート隊は従来の警備中心の任務から攻撃主体の任務へと転換したという。マッカーサーはこのような実績を踏まえて、コレヒドール脱出時には本国政府や軍部首脳が想像しなかったPTボートを選択して驚かせたが、無事に脱出を成功させたのである。それはマッカーサーの面目躍如たるものがあった。この成功劇は「マッカーサー将軍への大きな贈り物だった」とバックリーは自慢する。

またマッカーサーは、バックリーのような大胆で無鉄砲なファイターを好んだ。「知らない者が操作する潜水艦には乗りたくない。私はこの男が好きだから、彼に自分の運を任せたい」とマッカーサーは考えたわけである。実際バックリーはマッカーサーの期待に応え、厳しい試練を乗り越えて、マッカーサーとその家族、そしてバターンボーイズを南方ミンダナオ島のカガヤンまで無事送り届けたのである。その後の彼は、ヨーロッパ戦線に参加し、次いで太平洋へと戻りPTボートの指揮官となった。海軍でも多岐にわたる経験を積み、一九八〇年代まで現役であった。彼は一九九〇年代半ばまで存命したため、バターン・グループを知る最後の人物となった。(25)

(1) *Ibid.*, Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army. マッカーサーに対するアイゼンハワー自身の評価は落ちていたが、マッカーサーはそれを全く認識していなかった。—— *ibid.*, *The Eisenhower Diaries*, p.37.
(2) Papers of Lieutenant General Richard Kerens Sutherland, USA (Retired), RG46.
(3) Willoughby, Charles A., Biographical Sketches of Persons Interviewed: MacArhur Oral History Project compiled by Judy R. Hotard.
(4) Oral Reminiscences of Major General Richard J. Marshall, July 27, 1971.
(5) Excerpts from Oral Reminiscences of Major General Courtney Whitney, August 28, 1967.
(6) *Ibid.*, Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
(7) MacArthur Memorial Library Collection.
(8) MacArthur Memorial Library Collection. 思想の科学研究会編『共同研究　日本占領』(徳間書店、一九七二年刊)四四一頁参照。
(9) 竹前栄治著『日本占領　GHQ高官の証言』(中央公論社、一九八八年刊)一六七頁。
(10) Cappy Harada氏へのインタビュー(一九八四年九月一四日、ニューヨーク市アスレティック・クラブにて)。
(11) MacArthur Memorial Library Collection.
(12) *Ibid.*, Oral Reminiscences of Major General Richard J. Marshall; *ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; The Sun News, May 1, 1942; The Argus, Melbourne, May 1, 1942.
(13) MacArthur Memorial Library Collection.
(14) Oral Reminiscences of Major General Charles A.Willoughby, July 30, 1971.
(15) *Ibid.*, Oral Reminiscences of Major General Richard J. Marshall.
(16) MacArthur Memorial Library Collection.
(17) MacArthur Memorial Library Collection.
(18) General LeGrande Diller, 9/26/1982.
(19) Sid Huff, My Fifteen Years With General MacArthur; By his long-time aide Col. Sid Huff, USA with Joe Alex

Morris, 1964.

(20) MacArthur Memorial Library Collection.

(21) MacArthur Memorial Library Collection.

(22) Papers of Jean MacArhur, Oral History, Transcript #7, GR13, August 17, 1984.

(23) RG-46: Papers of Lieutenant Paul P. Rogers, USA.

(24) *Ibid.*, Jean Faircloth MacArthur #7.

(25) *Ibid.*, Admiral Charles Balkeley.

(3) 日米開戦前夜からマニラ脱出まで
――一九四一年一〇月から同年一二月まで――

1 日米開戦以前のワシントン

一九四一（昭和一六）年一二月八日午前三時一九分（現地時間では七日午前八時一九分）、日本軍によるハワイ・パールハーバー攻撃開始によって日米開戦の火蓋が切って落とされた。では、その直前におけるワシントンと現地マニラのフィリピン防衛構想とはどのようなものであったのか。

ワシントンでは、開戦二カ月前の一〇月八日、陸軍参謀部の戦争計画部（WPD）部長レナード・ゲロー（Leonard T. Gerow）准将の下でまとめられた覚書「フィリピン諸島の戦略概念」[1]がヘンリー・スティムソン（Henry L. Stimson）陸軍長官に提出された。その概要は以下のとおりである。すなわち、

①日本はソ連東部、中国、マレーシアへの支配を熱望している。もし状況が有利になれば、日本は戦争へと乗り出すだろう。②現在の抑止力はフィリピンの強力かつ攻撃的な空軍によって維持されており、これをさらに強化すべきである。③フィリピン諸島は日本の南進の経路に当る。もし日本がフィリピンを避けて西進すれば、日

本の兵站線は常に空と海からの攻撃にさらされる。もし日本が東進すれば、米太平洋艦隊の攻撃を受けることになる。たとえ日本がフィリピンへの通路を巧みに避けても、英・蘭合同空軍からの攻撃に直面する。したがって、(日本の南進)作戦はコストが大きく、最後の手段以外にはフィリピン・コレヒドール島への攻撃実施を躊躇するだろう。⑤四一年五月時点のフィリピン軍は約二万九〇〇〇名(訓練中のフィリピン陸軍予備軍は九万一〇〇〇名)のほか、対空砲部隊一個連隊、戦車一個大隊(五四両)等であり、重爆撃機九機、新型機八一機を保有する空軍は、同年末に重爆撃機三五機、軽爆撃機五二機、その他五〇機へと拡充される予定である。

上記のようにWPDは、日本の軍事能力を決して軽視してはいないものの、フィリピンの陸空軍への信頼度が比較的高く、日本軍の南進に対する連合国軍の抑止効果という点では意外なほど楽観的であった。

マーシャル陸軍参謀総長も、一〇月二一日、ルーズベルト大統領宛覚書で、「フィリピンを守備する米比軍は三万一〇〇〇名である。日本は揺れ動いており、日本の眼前にある強力な(連合国の)空海軍が日本軍の行動を抑止するか、あるいは日本を枢軸国側から引き離すかもしれない。ただし日本が(開戦へと)動けば、その制圧は困難であろう」と万一の事態に警鐘を鳴らした。(2)

またマーシャルは、翌一一月一九日、日米交渉決裂という最悪の事態に備えて、参謀部幕僚に日本空襲を実施するための情報収集を指示した。とくに彼は、一二月一日に宣戦が布告された場合、ソ連のウラジオストック周辺基地から(米軍機が)日本を攻撃する可能性を考慮していたため、マッカーサーが日本をどのように攻撃するのかを知りたがった。その意味で、マーシャルはマッカーサーの下に派遣された極東陸軍航空部隊司令官のブレアトン少将に大きな期待を寄せた。ブレアトンが一一月にマニラ到着後、鉄鋼産業、石油・電力産業などに関わる日本本土の工業地帯約六〇〇の目標箇所を示した地図がマッカーサーの下へ送られ、フィリピンの米空軍による日本空襲が討議された。最優先の攻撃目標となる鉄鋼産業が特定地域に過度に集中していることや、横浜や東

京など大都市が人口過密であるため、空襲の効果は大きいと判断された。しかし最終的には、「われわれが攻勢に転じるには早すぎる。一六〇機から一七〇機の重爆撃機がフィリピンに配備されれば空軍力は強化されるが、現状では強力な空軍とはいえず、論議されている日本空襲は、フィリピンの空軍力が依然弱い」と否定的な結論となった。[3] さぞマーシャルは落胆したであろう。

対日攻撃が難しいとなれば、フィリピンの防衛態勢は受身に徹するほかない。一一月二六日午前、マーシャルは、ゲロー部長、陸軍空軍部隊司令官ヘンリー・アーノルド（Henry H. Arnold）少将、WPD部員のチャールズ・バンディ（Charles W. Bundy）、トマス・ハンディ（Thomas T. Handy）両大佐を参謀総長室に集めて重要な会議を行った。マーシャルは、「ルーズベルト大統領とハル国務長官が日本との交渉は早期に中断するだろうと考えている」、また「両者は開戦時に日本軍がフィリピンを猛攻撃する可能性を予期しているが、私はその可能性はないと述べた」旨を明らかにした。そして、その理由として、「日本がフィリピン攻撃を実施するには前記のような多くの障害があるからだ」と指摘した。この会議では、マッカーサーに対し、「どのような指示を出すかが緊急課題である」との認識で一致し、もし「交渉が行き詰まり、開戦を回避できないとすれば、アメリカは（日本からの）最初の明白な第一撃を避けるよう」マッカーサーへ伝達すべきであり、またマッカーサーが日本軍への偵察行動を制約されることなく、米海軍を支援して、同海軍に日本の輸送船団を攻撃させることも提言された。[4]

以上のように、マーシャルが日米開戦を確信しながらも、日本軍のパールハーバー攻撃の可能性と同様、フィリピン侵攻の可能性をほとんど否定していたことはきわめて重大であった。海軍を統率する作戦部長のハロルド・スターク（Harold R. Stark）大将もマーシャルの見解に同調していた。では陸海軍の両首脳は、日本軍の最初の進攻地点をどのように予想していたのか。両者は翌二七日の大統領宛覚書（主題「極東情勢」）の中で、「も

し交渉が決裂したならば、日本はビルマ、タイ、マラヤ、蘭印（インドネシア）、フィリピンを攻撃する可能性がある。最近の日本軍の動きはすべて南方へと向いている。ただしルソン島の米軍部隊が移動しない限り、マラヤや蘭印への直接攻撃は難しい。とすれば、ビルマかタイが比較的大きな衝突無しに介入できる地域となり、両国への攻撃が日本の目標となる」と推定した。ただし両者は、「ビルマ攻撃は難しく失敗するだろう」との楽観的な分析を依然示した。

そこでマーシャルとスタークは、「日本がタイへと進駐した場合、米・英・蘭三国政府は日本に対し、『境界行為は戦争を導き入れる』と警告すべきである。警告を発する以前には、連合国の軍事対抗措置は取られるべきではない」と大統領に進言した。結局両者の進言が容れられて、一二月一日、三国政府は「米・英・蘭印の重大な利害から、フィリピン諸島の周辺水域ないし南シナ海における日本遠征軍の行動を敵対行為と見なす」旨の警告を日本政府に発した。[5] 同日、日本側は御前会議で米英蘭三国への開戦を決断していたが、ワシントンの陸海軍首脳は日本への対抗措置に踏み切ろうとはせず、傍観する態度を取り続けた。日本軍によるハワイおよびフィリピンへの奇襲作戦が秒読み段階に入っているとはまったく予想していなかったからである。このようにフィリピンの現有勢力の存在が日本軍の南方進出を牽制していると軍部が深く信じていたことは、結果論としても、驚くべき誤認であった。その点では、まだルーズベルトやハルの方が的確な予想をしていたといえる。

2　日米開戦以前のマニラ

では現地マニラはどうであったのか。一九四一（昭和一六）年七月二六日に創設された米極東軍（USAFFE）司令官に就任したマッカーサーは、八月一日、戦争計画部（WPD）が勧告したフィリピン防衛力の大幅な強化（七月三一日にマーシャルによる承認済み）を当然ながら認めた。その結果、七月以降にフィリピンには大量の人員

と物資が投入され、一一月にはニューメキシコ州兵部隊が投入されて、米軍守備隊は三万一〇九五名（このうち一万二〇〇〇名がフィリピン・スカウト）へと増強された。そのほかフィリピン陸軍の予備軍一〇個師団、約一〇万名が存在した。(6) その一方でマッカーサーは、これまでフィリピン防衛の土台を築いてきたフィリピン米軍司令官のグルナート少将をその地位から追い落とした。そしてグルナートの上級幕僚たちを自己の幕僚に転任させて、フィリピン人部隊の将校に対する訓練を徹底的に行わせた。このグルナート解任に対し、マッカーサーへの不満や不信感を抱いた上級将校が米軍内に少なからずいた。(7)

一〇月二八日、マッカーサーはマーシャルに対し、楽観的なフィリピンの軍事状況の概要を示した上で、現地軍の「士気は高く、訓練の結果、期待以上のものへと進展した」と自慢げに報告した。さらに彼は、フィリピン防衛のために陸軍省が作成した「レインボーⅤ」の作戦計画を修正するよう要望した。

そもそも「レインボー」作戦計画とは、一九三九（同一四）年六月に策定された戦争の想定計画であり、五種類の異なった情勢を基礎としており、従来のオレンジ・プランなどの色別計画とは区別された。このうち「レインボーⅡ」は五計画の中で、太平洋に対しもっとも積極的な作戦を行う内容であった。しかし第二次大戦勃発後にフランスが敗退し、イギリスも降伏するかもしれないという緊急事態に直面し、アメリカはアジアよりもヨーロッパの方が自国の安全保障にとってより重大かつ深刻であると受け止めた。そこで翌一九四〇（同一五）年一一月、スタークとマーシャルは、アメリカが参戦する場合、大西洋では〝攻勢〟を取り、太平洋では〝防勢〟を取るとの戦略をルーズベルトに進言した。こうしてアメリカは「レインボーⅡ」から、単独の戦争を想定する「レインボーⅣ」へと傾き、艦隊をハワイに留めたまま、フィリピンには海軍の増援部隊を派遣しないなど、「太平洋方面では戦略防勢を取る」作戦を固めた。さらに一九四一（同一六）年四月、統合参謀本部（JCS）とスティムソン陸軍長官は、「まず西半球の防衛を確保し、米軍部隊を東大西洋とアフリカおよび欧州大陸のいずれ

か、または双方に速やかに投入し、独伊両国を屈服させるために、イギリスら連合国と協同して攻勢作戦を実施する。欧州の枢軸諸国に対する作戦の成功によって、主力部隊を太平洋へと振り向けることができるまでは、太平洋では日本に対して戦略防勢を取る」という「レインボーV」の作戦へ転じることを承認したのである。(8)

ところがマッカーサーは、上記の「レインボーV」の作戦計画を、「マニラ湾防衛という古いコンセプトに基づいている」ために同意できないと切り捨て、フィリピンの軍事力が向上したことを踏まえた、「群島の完全な防衛とフィリピン沿岸の防衛」のための新計画を承認するよう強く求めたのである。以前アイゼンハワーら幕僚が困難であると判断した軍事戦略に彼は引き続き固執していた。

一一月初旬、ワシントンからマニラに到着した極東陸軍航空部隊司令官ブレアトンは、マーシャルのマッカーサー宛書簡を携えており、この書簡でマーシャルは、マッカーサーが主張する「レインボーV」修正案を承認していた。マーシャルの承認を得たマッカーサーは、北部ルソン軍と南部ルソン軍を創設し、南方にもビサヤ軍とミンダナオ軍を新設した。ジョナサン・ウェーンライト(Jonathan Wainwright)少将に率いられた北部ルソン軍(約二万八〇〇〇名)は、フィリピン陸軍第一一、第二一、第三一の三個師団、第二六騎兵連隊(フィリピン・スカウト)、そして米軍第四五歩兵大隊から成り、その役割はリンガエン湾とバターン半島を含むマニラ北方の全域を防衛することであった。南部ルソン軍(約一万六〇〇〇名)は、フィリピン陸軍第四一、第五一の二個師団と米軍野戦砲連隊で構成され、指揮官はジョージ・パーカー(George M. Parker, Jr.)准将であり、マニラ南部の防衛に当った。(9)

一〇月に技術部長として帰任したケーシー大佐(バターンボーイズの一人)は、当時の状況を次のように回顧している。「フィリピンでの軍事施設や軍備などの改善はまったく実行されていなかったが、私が到着する直前、それらの改善が決定され、急速に防衛力が強化されるようになった。多くの部隊を太平洋へ増派する準備が進み、

武器など多くの装備品を追加する命令が下り、空軍の強化も手配された。もちろん飛行場の建設と改善、レーダーなど通信施設も準備されることとなった。しかし戦争勃発時にはそうした準備は完了していなかった。もし戦争が勃発する三、四カ月前に達成されていたら、われわれはもっとうまく防衛できただろう。しかし当時はまだ防衛力強化の初期段階にすぎなかった」(10)。

ケーシーの証言のとおり、結果的にマッカーサーのフィリピン防衛体制強化は、日米開戦時には間に合わなかったのである。

3　パールハーバー潰滅

一九四一（昭和一六）年一一月二四日、マッカーサーはアジア艦隊司令官のハート少将から無線電報を受け取った。スターク海軍作戦本部長からの情報であり、「日米交渉はきわめて危うい。……フィリピンないしグアムへの攻撃の可能性がある」との警告であった。続いて二七日、マッカーサーは陸軍省から、「日本との交渉は終わりつつある。……敵対的な行動が今や起こされる可能性がある。……日本の敵対行動に先駆けて、貴官に必要と思われる偵察行動ないしその他の手段を講じるよう命じる。もし敵対行動が起こったならば、貴官はブレアトン将軍を介して貴官に発せられた『レインボーV』に基づく行動を遂行せよ。海軍作戦部長がこれに同意していることをハートに伝達せよ」との電文を受け取った。

同日、マッカーサーは高等弁務官のセイヤー（Francis B. Sayre）およびハートと協議した。マッカーサーは両者に対し、「現在の日本軍の動向からして、来春以前における日本からの攻撃はないと確信している」と述べた。当時、フィリピン陸軍第三一師団を指揮していたクリフォード・ブリューメル（Clifford Bluemel）准将も、一一月初旬、マッカーサーは「東条内閣は戦争内閣ではない。この内閣が倒れてその次の内閣が戦争を実行する内閣

となるだろう」と語ったと証言しており、[11] マッカーサーが日本軍の奇襲作戦をまったく想定していなかったことを明らかにしている。そのためか、翌二八日、マッカーサーはマーシャルに対して、「すべて完璧な防衛体制を整えている」と、またしても自信に満ちた電文を送った。アーノルド陸軍空軍部隊司令官からもフィリピンの空軍基地を防衛するよう警告があったにもかかわらず、マッカーサーは、開戦二日前の一二月六日、「ここの空軍基地すべては警戒態勢にある」と冷淡な回答を出したほどである。[12]

以上のように、マニラの現地軍もワシントンの陸海軍首脳と同様に、日本軍による攻撃を予測せず、マッカーサーと幕僚たちは具体的な戦闘態勢を取っていなかった。明らかに慢心と油断があった。先のケーシーは、「米軍側には日本軍との衝突を警戒するような特別な空気はまったくなく、通常の戦争準備程度であって、興奮する様子などまったくなかった。たとえ日米間で戦争が起こったとしても、ハワイはあまりにも（日本から）遠いため攻撃などされるはずがない、というのがわれわれの大方の感じであった」と語っている。[13] それゆえ、一二月七日付のワシントン発マニラ宛の機密電報で、「午前八時、オアフ島のパールハーバーと飛行場が、日本の空母から発進した六〇機の急降下爆撃機による攻撃を受け、地上の施設と航空機が甚大な被害を受けた。戦艦三隻が撃沈され、さらに戦艦三隻も決定的な打撃を被った。一一時から始まった第二次空襲では、ウェーキ、グアムも攻撃されたとの報告がある。空襲はすべて爆弾、魚雷、機銃によるものである。日本の第一目標は空海軍の施設と艦艇にあった」との報告に接して、マッカーサーらはさぞ耳を疑ったことであろう。[14]

ではマッカーサーとその幕僚たちは、この緊急事態にどのように対処したのか。ジョン・J・ベックの著作を中心に、マニラ側の対応を明らかにする。[15]

ハワイ攻撃の時点で、参謀長のサザーランド少将、参謀次長のマーシャル准将と技術部長のケーシー大佐は第一軍事宿舎で就寝中であった。午前三時過ぎ、通信部長のエーキン准将が部屋に入ってきて、サザーランドに

「パールハーバーが日本の航空部隊によって攻撃された」と告げた。直ちにサザーランドは個人専用回線の電話を使って、マニラホテルのペントハウス・アパートにいるマッカーサーに連絡した。「パールハーバー！」とマッカーサーはまだ信じられないように繰り返した。午前三時五五分、アジア艦隊司令官のハートからマッカーサーは攻撃の確認を受けた。ハートはパールハーバーの太平洋艦隊司令官（キンメル大将）からメッセージを受諾したところであった。

午前五時、マッカーサーの幕僚は、マニラ市内の古い城壁内にあるカレ・ビクトリア一号棟に緊急集合した。マッカーサーは米比両軍に緊急態勢を命令した後、フィリピン市町村にある自警団を警察軍および民間緊急軍として改編するよう措置した。極東空軍司令官のブレアトンは同じ午前五時に司令部を訪ねたが、マッカーサーは会議中であったため、ブレアトンはサザーランドに対して、台湾南方の日本空軍基地をB17爆撃機によって攻撃する許可を求めた。サザーランドはこの攻撃計画に同意し、「マッカーサーから夜明けの攻撃許可が得られるだろう」と述べた。司令部を去ったブレアトンは、マッカーサーからの命令が出るのを待った。

午前七時半、マッカーサーは陸軍省から第二の電報を受け取った。「米・英・蘭と日本との戦争は始まった。日本は一二月七日早朝にパールハーバーを空爆した。『レインボーV』に明記された任務を遂行せよ。英・蘭両国との協力に加えて、貴官の主要な使命であるフィリピン防衛を達成せよ」との趣旨であった。午前七時五五分、ワシントンのゲローからマッカーサーに電話が入り、「フィリピンは攻撃されているか」と尋ねられると、マッカーサーは「まったく攻撃はない」、ただ前夜の一一時半から一二時にかけて「爆撃機の編隊が飛来したと伝えられたが、沿岸から三〇マイルの地点で引き返した」と答え、「われわれには海軍からまったく情報がなかった」と苦言を呈した。そして最後にマーシャルに対して、「われわれの尻尾はしっかり上に立っている（戦闘意欲は十分であるとの意味）」との伝言を依頼した。[16] なおマッカーサーはパールハーバー攻撃の第一報に接したとき、米軍

の勝利を確信する発言をしたと伝えられている。しかし、彼自身の回想記では、「私は日本軍がハワイ攻撃に成功したと聞いて驚嘆した」と素直に記述しており、いかに日本軍の奇襲が想定外であったかを如実に物語っている。(17)

4　クラークフィールド潰滅

さらにマッカーサーをさらに驚愕させる事態が、この電話連絡から約四時間後に起る。それは日本軍機によるマニラ近郊のクラークフィールド空軍基地への急襲であった。

午前八時三〇分、クラークフィールド北方のかなり上空を航空機の一群が飛行中との報告が入り、飛行場のB17爆撃機全機に対して飛行準備が命じられた。ところが二〇分後、サザーランドはブレアトンに電話し、「予定していた台湾爆撃を延期する」と命じた。そのわずか一三分後、サザーランドはクラークフィールド北方から日本軍機が飛来しつつあることを知らされた。ブレアトンは直ちにサザーランドを訪ね、もし日本軍機がクラークフィールドの攻撃に成功したら「B17による攻撃作戦は不可能となる」と伝え、改めて攻撃実施の許可を要望した。午前一〇時一〇分直前、サザーランドはブレアトンを呼び出し、「マッカーサーが台湾へ偵察隊を送ることを決定している」と伝えた。そこでB17への燃料補給と大掛かりな攻撃の説明を行うため、飛行隊員に全員集合の暗号メッセージが発せられた。まずB17三機が偵察のために台湾へ飛び立ち、その後に残りの全機が爆撃に向けて発進する予定であった。

午前一一時、サザーランドはブレアトンに電話し、「爆撃命令は下りるだろう」と述べた。五五分後、サザーランドは「マッカーサー将軍の指令で」再びブレアトンに電話し、二時間後に予定されている対空作戦の報告を求めた。ところが午後一二時三五分、偵察行動に出るパイロット達が説明を受けている最中（その他の者たちは

昼食中）、日本の爆撃機や戦闘機の一群が二万フィート（約六〇〇〇メートル）上空からクラークフィールドを急襲し始めたのである。皮肉にも、レーダーシステムは日本の攻撃時にクラークフィールドでは設営されつつあったが、警戒態勢が取られていなかったため、日本軍の攻撃に際して何ら効果がなかった。そして午後一時三七分に日本軍の攻撃が終了したとき、米極東空軍の戦力は半減していた。B17爆撃機三五機のうち一八機、P40戦闘機五三機とP35戦闘機三機、その他雑多な航空機二五ないし三〇機（合計九九ないし一〇四機）がすべて破壊された。さらに整備員八〇名が死去し、一五〇名が負傷した。ここにフィリピン空軍は潰滅状態となり、クラークフィールドは第二のパールハーバーとなったのである。一二月九日の『朝日新聞』は、「ハワイ・比島に赫々の大戦果　比島で敵機百を撃墜」とその戦果を大々的に報じた。

以降、「空軍力を用いて敵の攻撃からフィリピン全島を防衛する」との方針は、根本から修正を余儀なくされた。こうしてブレアトンとマッカーサーは、クラークフィールド潰滅の責任を負うことになった。午後三時五〇分、ブレアトンは米極東軍司令部でマッカーサーとその潰滅について討議した。マッカーサーは午後五時三〇分にセイヤー高等弁務官との会議をもったが、セイヤーがマッカーサーの部屋に入ると、マッカーサーは「部屋の中を行ったり来たり」しており、その顔には沈痛な表情がうかがえた。

マッカーサーは回想記の中で、この惨劇を次のように叙述している。「（日本の）陸軍機三〇七機、海軍機四四四機、合計七五一機のすさまじい攻撃にさらされた。われわれは七対三の比率で不利だった。午前十一時四五分、圧倒的な勢力の敵編隊がクラークフィールド飛行場に迫っているとの報告が入った。味方の戦闘機は直ちに飛び立ってこの編隊に向かったが、爆撃機は離陸が遅れて大損害をこうむった。なんと言っても、こちらの空軍は小さ過ぎて、劣勢の前に手の下しようがなかった。結局損害は避けられず、味方の空軍力は敵に圧倒された」[18]。

しかしこの記述にはかなり誤りがある。第一に、クラークフィールドを急襲した日本海軍機は一式陸攻一〇六

機、ゼロ戦八五機の計一九一機編成であった。第二に、当時の米極東陸軍航空部隊は、第四混成隊、第一九爆撃隊、第二四追撃隊、第二七爆撃隊などで構成されており、クラークフィールドなど五つの航空基地に、爆撃機のB17三五機、B18A一八機、A27九機、B10B一二機、戦闘機のP40E一〇七機、P26A一六機、P35A五二機、総計二四九機を保有していた。[19] 現地の米航空兵力は数の上で決して劣勢とはいえず、上記の日本軍機数には誇張があった。

とくに深刻な問題は、マッカーサーがブレアトンの作戦計画に耳を傾けなかったことである。ブレアトンはパールハーバー攻撃の情報を入手すると、早朝の五時過ぎ、マニラのマッカーサー司令部に駆けつけ、前記のとおり、サザーランドにB17爆撃機一八機を出撃させ、台湾水域にいる日本軍輸送船を爆撃することを進言した。彼はすでにマニラ着任以前にワシントンで日本空襲策を協議しており、また台湾の日本軍への攻撃作戦を検討していたからである。しかしマッカーサーはこの提案を無視し許可しなかった。マッカーサーによれば、「サザーランドがこの問題で私に会った事実はなく、またブレアトンも私に対しては台湾攻撃などという案を一度も口にしなかった。私はその話を、その後何ヶ月か経って新聞報道ではじめて知ったのだが、そのような提案があったことは司令部の記録に全く残っていないところからみて、おそらく非常にぼんやりとした軽い提案だったに違いない」と斥けている。[20] しかしながら、前後の文脈からして、マッカーサーがまったく台湾攻撃の作戦について知らなかったことはありえず、この言が彼の自己弁護であることは明らかである。

当時コレヒドール島の沿岸砲兵部隊の中隊長を務めていたベンソン・ガイトン(Benson Guyton)大尉は次のように証言している。「八日の早朝三時にパールハーバー攻撃のニュースを聞いたが、昼にはクラークフィールド攻撃の一報を受けた。……(のちに)クラークフィールドを守備していた対空砲部隊にその責任が向けられた。この部隊は連隊長から命令されるまでまったく砲撃しなかった。戦争勃発の一〇日前、私は『コレヒドール島に

飛来するものは何でも撃て』との命令を受けていた。コレヒドール島はクラークフィールドとはまったく異なる防衛態勢を固めていた。わが軍の航空機はコレヒドール島に飛来することを禁止されていた。だからわれわれは（敵味方の）識別に苦労しなかった。クラークフィールドの連中はいろいろ問題があったのだろう」。

さらにガイトンは、ブレアトンやサザーランドの責任ではなく、マッカーサー自身の責任をはっきりと指摘する。「私は何人かのB17のパイロットと話した。彼らはすべてマッカーサーが台湾出撃をさせなかったとの意見であった。空軍はパールハーバーが攻撃されたことを知ると、直ちに爆撃機に燃料を注入し、爆弾を装填させ、マッカーサーに対して『準備が完了しており、以前決定した台湾の目標を攻撃できる』と報告した。しかしマッカーサーは『それはできない』と述べた。結局〝偵察行動〟に限定された」。マッカーサーは「ブレアトンからまったく報告を聞いておらず、その報告は参謀長を通していなかった」と証言しているが、ガイトンは「パイロットと副操縦士の大半、九〇～一〇〇％が『これはマッカーサーの責任だ』と私に話した」と断言する。(21)

逆にケーシーは、ブレアトンの責任論を唱えている。すでにマッカーサーはクラークフィールドのB17全機をミンダナオ島へ退避させるようブレアトンに命令を発していたにもかかわらず、彼はその命令を実施していなかったからである。実際ケーシーはサザーランドがブレアトンの参謀長フランシス・ブレイディ（Francis M. Brady）に、「なぜミンダナオへ行かないのか、早く（B17を）移動させろ」と激怒しながら命令したのを目撃しており、「もし命令通りに実行されていれば、米軍機は潰滅することはなかったろう」と証言する。ところが空襲を受ける前日、第二七爆撃部隊関係者による〝ブリアトン歓迎パーティ〟があり、彼らは恐らくその後にB17の移動を実施する予定ではなかったかと推測される。ともかくケーシーは、この事件の責任は「マッカーサーではなく、命令実施を怠ったブレアトンら空軍関係者にある」と主張する。同様の指摘は、やはりバターンボーイズとなるマッカーサーの副官ハフからも出されている。(22)

確かにブレアトンは、昼食中に対空防護する用意を欠いた非を認めざるをえないであろうし、その前段階で、サザーランドを介したマッカーサーからのB17全機の退避命令を実行せず、B17一六機をミンダナオ島のデルモンテ飛行場へ移動させるに止まった点は弁解の余地がない。他方マッカーサーは、ブレアトンが強く望んだ台湾の日本軍飛行場空爆の命令発出に逡巡しすぎた。「攻撃には至らない偵察行動に限る」との命令をワシントンが発していたとはいえ、この瞬時の判断ミスは取り返しがつかないほど甚大な影響を及ぼした。結局彼が修正を求めた「レインボーV」作戦計画の実施を自ら怠ったと同然であった。

さて日本側は、パールハーバーでの大戦果に続いて、対フィリピン緒戦でも大成功を収めた。日本の陸軍航空部隊はルソン島北部のツゲガラオ飛行場と中部のバギオ兵営を爆撃し、海軍航空部隊はマニラに近いクラーク飛行場とイバ飛行場を空爆した。さらに二日後にはニコルス、ニールソン両飛行場などを爆撃し、この二日間の空襲でフィリピンの米航空戦力をほぼ壊滅させるほどの大戦果を上げた。しかも米空軍基地に止まらず、マニラ湾に臨むカビテの米海軍基地にも激しい攻撃を加えた。米軍側にとって不幸中の幸いは、クラークフィールドの空爆直後、ウイリアム・グラスフォード（William A. Glassford）少将が指揮するアジア艦隊が安全な南方へと緊急退避し、難を逃れたことであった。[23]

こうした状況の中で、ブレアトンは彼の指揮する第一九爆撃連隊の航空部隊をオーストラリアと蘭印のジャワ島へ退避させることにした。マッカーサーは本人がそれを「進言した」と記述しているが、ブレアトン自身は「残って戦いたいとマッカーサーに進言したが、退避となった」とあり、両者の発言は食い違う。クラークフィールドで大きな失敗を犯したマッカーサーには、ブレアトンへの負い目があったのかもしれないし、マッカーサーはマーシャル参謀総長に直結するブレアトンを嫌って、彼を遠ざけたと見ることもできよう。マッカーサーは、「あとに残った戦闘機隊がジョージ将軍のみごとな指揮の下で大いに奮闘したが、結局壊滅した。それでもジョ

ージ将軍は残った四機でスービック湾に最後の攻撃をかけ、増援部隊を乗せた敵の輸送艦一隻を撃沈することができた」と、ブレアトンの後任ジョージ准将の功績を指摘する。ジョージはのちにバターンボーイズの一員となる人物である。[24] なおブレアトンは、一二月一〇日、電話をしてきたアーノルド空軍司令官に対して、「私としては最善を尽くして台湾攻撃を主張したが、上層の権威者（つまりマッカーサー）の厳しい守勢的態度によって斥けられてしまった」と釈明している。[25]

さてクラークフィールドの米陸軍航空部隊の壊滅は、マッカーサー軍の緒戦における手痛い敗北となった。日本軍のパールハーバー攻撃が米太平洋艦隊の崩壊であるとすれば、日本軍のクラークフィールド攻撃は米極東空軍の崩壊を意味し、ハワイとフィリピンを結ぶ「太平洋の防波堤」は崩れ去ったのである。フィリピン戦の敗北は、すなわち、マッカーサーの敗北であり、それはマッカーサー自身の輝かしい軍歴に汚点を残す結果となった。しかし彼は自己の責任論を一蹴し、批判の矛先をワシントンと海軍へと向けた。「フィリピンのわが空軍力が役に立つかどうかという問題は、真珠湾の米艦隊が壊滅したことで、もはや意味のないものとなっていた。当時、太平洋の米軍は『レインボーV』と呼ばれる基本的な戦略計画を立てていた。……太平洋で戦争が起こった場合には海軍が海上の補給線を維持し、地上兵力は四カ月ないし六カ月敵の攻撃をもちこたえ、その間に太平洋艦隊が巨大な海上戦力を動かして救援部隊を運び込む、ということになっていた。ところが、海軍が補給線を維持できなかったため、修理資材、兵器、爆弾、燃料その他の必要な補給がとぎれ、フィリピンにある航空部隊は活動できなくなってしまった。……真珠湾に対する一撃は、太平洋艦隊に損害を与えただけでなく、同時に在フィリピン航空部隊が将来力を発揮する可能性もつぶしてしまった」とマッカーサーは強弁した。

また海軍に対しても、「『あの時米艦隊はマニラに向かい、窮境にある現地の米軍を救援すべきだったと多くの人が考えているが、それはできなかった。当時われわれが持っていた程度の戦力では、そのような行動は惨憺た

る結果に終わっただろう』と海軍作戦部長キング(スタークの誤り)提督は主張しているが、しかし海軍は自分の力を過小評価していたのであって、窮境にある米軍を救うため封鎖線を突破することはできたはずだと私は考えている。日本のフィリピン封鎖はある程度形だけの封鎖だった。……真珠湾では空母は一隻も失われなかった。……しかも海軍は日本側の暗号を解読して日本艦隊の所在場所を知っていたし、大西洋と地中海には連合国が大海軍力を擁していた。もし米海軍があの時本気で努力していたら、フィリピンを日本軍の手に渡さずにすみ、日本軍の南と東への進撃を食い止めることができたかもしれない」とマッカーサーは指摘し、海軍の判断の甘さと弱気を非難した。

さらにマッカーサーの批判の矛先は、本国の最高指導者にまで向けられた。「おそらく最高レベルでは、極東での犠牲の如何にかかわらず、大西洋戦争を優先させるという方針をとっくに決めていたのだろう。日本軍の真珠湾攻撃後(一二月一二日)ワシントンで開かれた会談で、ルーズベルトとチャーチルはドイツを破ることにまず集中するという政策を確認した。欧州で勝利を収めるまでは、太平洋での作戦は手元にある限られた戦力で日本軍を阻止する程度にとどめる、ということになっていた。米国の陸軍参謀総長(マーシャル)はこの方針を支持していた。しかし、不幸なことに、私はこのような重大な会議の内容を当時まったく知らされず、われわれを救援するための勇敢な努力がはじまろうとしていると信じ込んでいた。私は極東での米航空戦力を強化することをかねてから主張していた。もし私のこの計画が実現していたら、全く別な結果になっていたかも知れない」[26]。

アメリカが〝ヨーロッパ第一主義〟を取り、太平洋方面では守勢方針を維持することは「レインボーV」に明記されていることであって、それをマッカーサーが知らないことはありえない。彼は、あたかも自己は正しく、悪いのは他者、つまりルーズベルト、マーシャル、スタークであると主張しているかのようである。マーシャルとスタークが日本軍の奇襲攻撃の可能性を軽視していたことは事実であるが、マッカーサーとてパールハーバー

攻撃もクラークフィールド攻撃もほとんど予測しておらず、その点では同罪といえる。にもかかわらず、自己の非を認めず、責任を他者に転嫁する、そのためには強弁や虚言も辞さないとすれば、これはマッカーサーの負の性癖といえるであろう。

5　米軍首脳の軍事作戦修正

さてハワイとマニラでの相次ぐ大敗北を受けて、ワシントンの陸海軍首脳は従来の軍事作戦計画の大幅な修正を余儀なくされた。一九四一（昭和一六）年一二月一一日付のスターク海軍作戦部長からマーシャル陸軍参謀総長宛の秘密文書（主題「太平洋における危険な戦略的状況」）は、以下のような作戦の修正を提言していた。[27]

①オアフ急襲で米戦艦・巡洋艦が打撃を受けた結果、日本は海軍力すべてを攻撃に集中させることが可能となった。日本は現在ミッドウェー島とウェーキ島を空軍基地と潜水艦基地として使用するため、両島占領を企図している。②現在太平洋中部に展開する日本艦隊は、戦艦八ないし九、空母五ないし六、重巡洋艦一二ないし一四、軽巡洋艦八、新型駆逐艦三〇から五〇、潜水艦約四〇、輸送船五〇から六〇各隻、その他の諸種艦艇や偵察機から成る。③この恐るべき日本艦隊に比して、米艦隊は大型空母三、重巡洋艦一〇、軽巡洋艦三ないし四、駆逐艦三五、潜水艦一三ないし一四各隻しかない。守備隊に加えて、ハワイ諸島の沿岸基地には、偵察爆撃機約三〇機、陸軍の重爆撃機一〇ないし一五機、軽爆撃機数機、その他四〇機、海軍の急降下爆撃機一個飛行隊、戦闘機数機がある。これら航空機は攻撃力が弱く、オアフ防衛の対空砲火が不十分である。④不十分な航空戦力に加えて、海軍艦艇は再度の空襲への防備が不十分のままである。もし再び攻撃されれば、港湾内の艦艇と商船は深刻な打撃を受けるだけでなく、残る軍用機すべてが破壊されよう。海軍造船所のほか、電力・燃料施設も深刻な打撃を受けよう。ハワイに貯蔵されている食糧は四五日分から六〇日分である。⑤日本軍のオアフ上陸は成功しないだ

ろうが、ハワイ、マウイ、モロカイその他の諸島への占領は容易であろう。米太平洋艦隊は日本軍の上陸を阻止できないだろう。⑦ハワイ諸島が日本に占領されれば、米国西岸、アラスカ、パナマ運河、太平洋を通過する航路が襲撃されよう。⑧この緊急事態に際して陸・海軍はハワイの全艦艇、地上部隊、空軍などの最大限の活用を考慮せねばならない。

同文書はまた、上記を踏まえて、第一にハワイ諸島の軍備強化、艦船の米西岸への移送、陸海軍航空機および食糧のハワイへの移送、ハワイ湾口での機雷敷設、小型機による常時監視などを提言した。

これに対してマーシャルは翌日、ハワイよりもむしろ「パナマ運河と米本土への空襲を防止する」ことが重要であると異論を唱えた[28]。実際、二一日の陸軍省WPDの草案(主題「戦略概観」)は、「日本は初期段階で重要な成功を収めた。日本は西太平洋の支配を達成したわけでないが、東太平洋の支配へと強く乗り出せるようになった。タイ、マレーシア、フィリピンにおける日本の立場は南西太平洋上の連合国領土に深刻な脅威を及ぼしており、さらにビルマ経由の中国援助ルートを封鎖しようとしている」と現状を分析した上で、日本は「南西太平洋における主要な作戦を続けるだろう。ビルマ・ルートを封鎖し、蘭印および同地域の連合国領土の再獲得を狙うだろう。今後の可能性としては、ロシア太平洋沿岸地域への攻撃、中国征服の完成、ハワイ諸島の占領達成、インドへの行動、パナマ運河への空襲とアメリカ西海岸とオアフへの空襲の実施がありうる」と予想しており、その情勢分析は米海軍のそれとは異なっていた[29]。

以上のような大局的見地から、同月一六日、陸軍省はマッカーサーに、「フィリピンの戦略的重要性は十分認識されており、貴官を支援するとの決意はまったく揺らいでいないし、今後も揺らがない。補給問題は太平洋での海軍の損失により複雑化しているが、貴官の一二月一四日のメッセージにあるように爆撃機の適切な増強は早急に行われる予定である」と激励を込めてメッセージを伝えた。これを受けたマッカーサーは大きな期待を抱い

たに違いない。しかし実際にはその期待は裏切られていく。ワシントンではルーズベルトがスティムソン、マーシャル、ノックス、スタークを招集し、マッカーサーが要求する空母派遣問題を討議した。席上スタークは、空母の極東派遣は「艦隊の破壊力を分断する」と主張し、航空機を補給するためにフィリピンに空母を派遣してほしいとのマッカーサーの要望に反対した。結局マーシャルは、空母をフィリピンへ派遣せずに同地へは航空機を運搬する方法を実施することを示唆してこの問題を決着させた。[30] 海軍側の積極的協力を得られないため、マーシャルは次第にフィリピンよりもオーストラリアを反撃の拠点として重視する方針を進めていく。それは結局マッカーサーに持久戦を強いることとなった。

6　日本軍のフィリピン上陸作戦

このようにワシントンがマッカーサー軍への積極的な支援態勢を固めることができない状況であったのに対して、日本軍はフィリピン方面の制空権を確保する初期段階から現地に上陸を敢行する本格的段階へと進めていた。すでに一九四一（昭和一六）年一一月六日、台湾軍司令官であった本間雅晴中将が、フィリピン攻略軍の第一四軍（通称号「渡」、第四八、第一六両師団、第六五旅団等を基幹とする総兵力六万五〇〇〇名）司令官に任命され、一〇日には陸軍参謀総長の杉山元大将から「作戦要領」を示達された。その中の「第一四軍作戦計画概要」は次のように定めていた。作戦目的は、フィリピンの敵を「撃破」し、その主要な根拠を「覆滅」すること。作戦方針は、陸軍は海軍と協同してルソン島に上陸し、速やかにマニラを攻略したのち、フィリピン要地を占領すること。作戦自体は、まず第五飛行集団がルソン島の敵航空勢力を空襲し撃滅することから開始し、次いで第四八師団（歩兵三個連隊、捜索一個連隊、山砲一個連隊、野戦重砲一個連隊、工兵一個連隊、戦車二個連隊、輜重兵一個連隊など）と上島支隊（歩兵一個連隊など）がリンガエン湾に上陸し、中部ルソンの敵を撃破してマニラを攻略するととも

に、第一六師団(歩兵二個連隊、捜索一個連隊、野砲一個連隊、工兵一個連隊など)がラモン湾に上陸し、南部ルソンの敵を撃破してマニラを攻略することであった。[31]

要するに、日本軍のフィリピン作戦(いわゆる比島攻略作戦)の方針は、まずルソン島を占領してマニラを攻略することであった。作戦要領はマレー作戦と異なり、まず航空部隊をもって敵の航空勢力を撃破し、次いで数個の先遣隊をもってルソン島北部の飛行場を占領して、速やかに戦闘および爆撃隊を進出させ、その掩護の下に軍主力をもってルソン北西岸のリンガエン湾に、一部をもって南東岸のラモン湾に上陸することであった。以後、両部隊は相呼応してマニラに向って進軍し、マニラの攻略をもってこの作戦の目的達成としていた。この作戦方針は、陸軍参謀本部が長年作戦計画として温めてきた内容そのままであった。日本海軍が伝統的に南進論の見地から米海軍との〝対決〟を重視してきたのに対して、日本陸軍はフィリピンと米軍を〝軽視〟してきたため、フィリピン作戦はマレー作戦と比較すると「はるかに気楽な気持ちで取り組んでいた」のである。[32]

一一月二四日から二七日まで台北で作戦会議が開かれ、そこで軍主力は作戦開始から一五日目頃にリンガエン湾へ上陸する旨が決定された。その折、第一四軍参謀長の前田正實中将は、「今度の戦争は比島人を相手とするのではなく米国を相手とするのであるから、掠奪、民家の焼却などないよう特に指導されたい」と要望した。二七日、ワシントンの日米交渉で「ハル・ノート」が提示された。日本側はその厳しい内容から、アメリカはすでに対日戦を決意した上で最後通牒を提出したと受け止めた。こうして一二月一日、御前会議が開かれ、「対米英蘭開戦の件」について聖断が下り、それから一週間後の八日の開戦が決定されたのである。そこで南方軍総司令官の寺内寿一大将は、第一四軍など南方軍の諸部隊に対して、各進攻作戦を開始するよう命令を伝達した。[33]

さて第一四軍の作戦準備は順調に進み、陸上および航空の各先遣部隊は、七日朝までに出発準備を完了した。日本では数少ない機械化兵団として有名な第四八師団(土橋勇逸中将)は一万六〇〇〇名であり、その先遣部隊

の田中、菅野両支隊は、一一月二七日に台湾の高雄から出航、一二月初頭までに馬公に集結し、上陸訓練など作戦準備を実施した上で、一二月一〇日から二〇日にかけてルソン島北部のアパリとビガン、続いてレガスピに上陸した。次いで本間軍司令官以下の主力約四万三〇〇〇名（第四八師団、第五飛行集団、船舶部隊など軍直轄部隊）は、集合や乗船などに相当な時間を費やしたが、第三艦隊の護衛の下に、七六隻の大輸送船団、九隻の海軍輸送船とともに南進し、二一日にルソン島北西部のリンガエン湾に到着した。他方、第一六師団（森岡皐中将）の主力約七〇〇〇名は、一七日、二四隻の輸送船隊で奄美大島を出航し、台風や強風などに翻弄されたが、米航空機や潜水艦の妨害を受けることなく南下し、二四日にはルソン島南東部のラモン湾に到着した。

これを迎撃する米比陸軍部隊は約一五万名であった。主力は米比軍のフィリピン師団（三歩兵連隊、二野戦砲兵連隊）のほか、一歩兵連隊、一騎兵連隊、二戦車大隊（各M3戦車五四両）、二野戦砲兵連隊、一沿岸砲兵連隊等であり、またフィリピン現地軍の一〇個師団（定員七五〇〇名）と巡警隊など約一二万名であった。数の上では圧倒的に優位な米比軍ではあったが、フィリピン現地軍の各師団は戦車や大砲などの装備が不足で脆弱であった。開戦直後に第一四軍が得た敵情報では、米比軍は主力（米師団と比島軍五個師団の各主力）を中部ルソンに集結させて、日本軍のリンガエン湾上陸作戦に備えており、一部（第四一、第五一師団）を南部ルソンの要所に配置して、ラモン湾からバタンガス湾にわたる南部地区への上陸作戦に備えている、とされた。そして既述のとおり、海軍第一一航空艦隊に所属する第五飛行集団がクラーク、イバ両航空基地を急襲し、撃墜したもの、地上で炎上したもの一〇〇余機との大戦果を上げたが、いまなお戦闘機約三〇機と大型機約一〇機の残存兵力があると敵情報は伝えていた。(34)

二二日早朝より、第四八師団の右翼隊がアゴー南方地区に上陸を開始し、まもなく同地を占領した。また左翼隊はアリンガイ付近に上陸を開始し、午前中に同地に兵力を集結させた。左翼隊の一部として上陸した上島支隊

の一兵士は、上陸当日の状況を次のように述懐している。「愈々敵前上陸だ。波風が荒かったが夜明前完全軍装で甲板に集結。今までお喋りばかりしていたが、だれ一人として喋る者もなかった。ただ命令を待つばかりである。海は真っ黒で波は高そうである。……命令が下り舟艇に移乗開始、縄梯子でおりて波の上下を考えながら飛び降りなければ怪我をする。上陸演習のお陰で皆な無事に移乗が終わり、舟艇は母船を離れていく。銃声が聞こえる。激しくなってきた。……〔我が第三大隊は〕岸の近くまできた時におし寄せて来る高波を二三度かぶって舟艇が沈み、飛び込んだ工兵隊の援助で全員無事に上陸に成功。……第一、第二大隊は苦戦。応援に向ったが相当数の犠牲者が出た模様である」。また別の兵士は、「輸送船を離れて五百メートル進み海岸より百メートルも手前で救命胴衣を着け、銃を頭上にかかげながら海に飛び込み、ビュンビュン散弾が飛ぶ中を必死になって海岸にたどりついた」と証言する。(35)

右翼と左翼の両隊はともに順調に上陸を完了すると、南方約二五〇キロのマニラを目標として進撃を開始した。その際、左翼隊の上島連隊長は「〔自動車部隊である〕第四八師団に負けるなと強行軍を命じ、途中、自転車部隊を編成して急進撃を続け、見事に第四八師団より早く目的地のタルラック（約一〇〇キロ）に着いて敵と激戦数時間でこれを破ったのです。一日平均二二キロの進撃はナチス独軍の電撃作戦にも勝るとの評判」であった。なお右翼隊主力は、ロザリオ付近を戦車で防備する数百の米比軍を駆逐して同地を占領、その一部は、アゴーから海岸道を南下し、サントトーマス付近で北進してきた戦車約一五両を有する米比軍と遭遇したが、これを撃破し、続いて南下した。他方、南部からの侵攻を受け持つ第一六師団は、二四日、大きな抵抗を受けることなくラモン湾に上陸し、約一五〇キロ前方のマニラに向って西進を開始した。(36)

さて北部ルソン地区には、ウェーンライト少将が指揮する米比軍約二万八〇〇〇名、南部地区にはパーカー准将が指揮する米比軍約一万六〇〇〇名がいたが、訓練された日本軍の敵ではなかった。米比軍の市民兵は日本軍

を見るや逃亡を始めた。一週間を経た二九日頃には、軍主力はマニラ北方約一〇〇キロのカバナツアンへ、第一六師団はマニラ南方約六〇キロのサントトーマスへと進出した。この頃、空中偵察によると、米比軍の有力部隊はマニラに拠ることなく、バターン半島へ向って退却しつつある状況が明らかになった[37]。しかし日本軍はそれが重要な意味をもつとは少しも考えていなかったのである。

7　マニラからコレヒドール島への退避

では日本軍の上陸にマッカーサー軍はどのように対処したのか。マッカーサーは前記のとおり、オレンジ、レインボー両計画で規定されてきた「マニラ湾の城砦型の防備」方針を、「フィリピン全諸島を積極的に防備する」方針へ変更せよと主張し、承認された。そしてさらにそれを「海岸線で日本軍の上陸を撃退する」方針へと転じた。しかし米アジア艦隊が退避していたこともあり、マッカーサーは日本軍先遣部隊の上陸を簡単に許してしまった。この上陸は彼の戦略がいかに現実性を欠いていたかを暴露する結果となったのである。結局マッカーサーはマニラから退避してバターン半島へ後退することを考えざるをえなくなった。つまり、彼が古いと否定した「オレンジ・プラン」や「レインボーV」計画へと後戻りしたわけである。彼は早くも日本軍の上陸から三日目の一二日朝、ケソン大統領に最悪の事態に備えるため、コレヒドール島へ移る準備をするように通告した。マッカーサーは全軍をバターン半島に集結させ、司令部をマニラからコレヒドール島へ移転して、首都マニラを〝無防備都市〟と宣言することを考えていた[38]。

一七日、マッカーサーは副官のハフを通じて、ケソンに「フィリピン連邦政府をマニラからコレヒドールへと移す計画である」と伝えた。ハフによれば、それはケソンが陸軍とともにマニラを去るか、それとも日本軍の手に落ちるかという問題であり、数日間に及ぶ議論ののち、ハフはマッカーサーから「〔ケソン〕大統領に対して、

私はコレヒドールにあなたを一緒に連れて行きたいと言え。君は彼を説得できるまでそこ(彼の下)にいろ」と命令された。そこでハフは、同日午後五時に結核を患っていたケソンを邸宅に訪ね、数時間丁寧に話したという。しかしケソンは首府を去ることを躊躇したため、マッカーサーと直談判することとなった。ハフは車のライトを消したままケソンを連れてマニラまで行き、裏口から人目を避けてホテルに入った。そこにはマッカーサーが待っていた。ちょうど夜九時であった。[39]

マッカーサーは「万一日本軍が最大の兵力で上陸した場合、北部ルソン軍と南部ルソン軍を分散させるのは賢明ではないだろう」と指摘し、「自分の計画では部隊をバターン半島に集中させ、コレヒドールで自分は最後まで戦うつもりである」と述べた。これに対してケソンは、「その場合、なぜ私までがコレヒドールへ行かねばならないのか」と質し、「フィリピンの軍事的防衛は主としてアメリカの責任であり、私の責任ではない。私はすでにフィリピン全軍を貴殿の下に置いている。……もし私がコレヒドールへ去れば、私の国民は自分の身の安全のために貴殿の保護へと走って、自分達を捨てたと考えるだろう。これは私にはできない」と反論した。するとマッカーサーは、「それは単なる逃避の問題ではない」、ケソンが以前、「マニラの破壊を避けマニラ市民の生命を救うため、マニラをオープン・シティとすることに同意した」旨を忘れないで欲しい、と指摘した。ケソンがなおも躊躇すると、マッカーサーは「フィリピン政府の首長が日本によって捕虜になることを阻止するのが自分の使命である」と本音を漏らした。ケソンは、「明日国会を召集し、彼ら(議員たち)の意見を聞く。その上で私の決定をあなたに伝える」と結論を出した。ハフは、その一五分後にマッカーサーから「君は実に良くやった。すべてはうまくいった」と褒められたと述べているが、恐らく真相は、やや時間を置いたのち、ケソンが自己の移動を了解した旨をマッカーサーに伝えたのであろう。[40]

他方でマッカーサーは、一二月二二日、次のような暗号電報を陸軍省に送った。「リンガエン湾に上陸した敵

軍は四個師団から六個師団の八万名から一〇万名である。ルソンでは約四万名の部隊が防戦可能である。……戦局が不利となった場合、最終的な防衛拠点をバターンとコレヒドールに置き、フィリピン国民を救うためにマニラと首都圏の解放を宣言することになろう。私は高等弁務官と政府をコレヒドールへ避難させ、コレヒドールを堅持するつもりである」。このマッカーサーの暗号電報を見たスティムソン陸軍長官は、マッカーサーが自軍の兵力を実際の兵力よりも過剰評価する傾向のあることを思い起こした。同日、マーシャルはマッカーサーに返信し、「貴官の提言された行動方針は承認された。貴官を早急に空から支援できるようにオーストラリアで最大限再建の努力している。昨晩、七〇機を乗せた輸送船団がオーストラリアに到着した。またB24三機が昨日出発した。B17三機も今日出発する予定である。（となれば）総計八〇機の重爆撃機となる。……大統領は貴官からのメッセージをすべて読んでおり、海軍に対して貴官を出来る限り支援するようにと指示している」[41]。

二四日、マッカーサーはマーシャルに対し、戦況の悪化についての暗号電報を送った。「北方では厳しい戦闘が続いている。マニラの先端地域は敵による爆撃を受けている。……私は今日の午後に高等弁務官と連邦政府を退避させ、『対空攻撃、対地攻撃の破壊が都市部に及ばないようにするために、マニラはここに軍事目的という特徴のないオープン・シティとなることを宣言する』旨を発するつもりである」。

この日、マッカーサーはカレ・ヴィクトリアの司令部で様々な報告に目を通し、指揮官や参謀たちと討議した。サザーランド参謀長とは軍事作戦について、マーシャル参謀次長とはバターン半島への物資輸送と要地の爆破について、ケーシー技術部長とは前線への補給と交通路・橋梁の破壊や発電施設について相談した。午前一一時、サザーランドは司令部幕僚らに対して、同日夜にコレヒドール島に司令部を設置するために出発すると伝えた。マーシャルは、戦闘部隊との連絡を保つためと、北部と南部の両ルソン軍のバターンへの撤退を調整するために、最後の最後までマニラに残留し、その退避寸前に移送できない施設などを爆破するよう命じられていた。日本軍

に利用させないためである。[42]

この間、ハフは移動のための準備に追われていた。まずケソンが持参する荷物の中身のこと、次いでセイヤー高等弁務官とその家族などへ一連の注意を伝えること、マッカーサーからの要望でジーン夫人へのクリスマスプレゼントを用意することであった。ハフはクリスマスイブ当日の様子について次のように述懐している。ハフは午後遅く、マッカーサーから「ジーンとアーサーとアチューを集めてくれ」との指示を受けて、周囲の者の注意を引かないように軽トラックに乗り、マッカーサーのアパートに着いた。すでにジーンは荷造りを終えていた。彼女はスーツケースには自分の物をほとんど入れず、多くの食糧とかアーサーの必要な衣服を入れていた。また四年前の結婚旅行の時に着た茶色のコートを急いで引っ張り出してきた。最後にマッカーサーの多くの勲章やメダル、フィリピン政府から授与された元帥の金の官杖をもってきた。それらをマニラホテルのタオルで包み、スーツケースの中に仕舞い込んだ。ハフはそのスーツケースを車に運び、車にはマッカーサー夫妻の長男アーサーの三輪車も押し込んだ。ジーンは全室の最後の点検をし、カストロというフィリピン人のボーイに後の世話を頼んだ。そして「われわれは急いで帰ってくるから」と言った。それから彼女は小さなブロンズの花瓶を見た。それは日露戦争のときに日本の明治天皇からマッカーサーの父親に贈られたものであった。花瓶の底には父アーサー・マッカーサーの名前と日付と天皇からの贈り物との文字が記されていた。「日本軍がそれを見たら、多分わが家を尊敬するでしょう」と彼女は半分笑って言った。彼女は息子の手を引いて「アーサー、コレヒドールに行く用意は?」と聞いた。空襲警報のサイレンが鳴ったので、三人はエレベーターへと向かった。[43]

ジーン自身は次のように振り返っている。「(午後)四時にカストロ、シド・ハフが私のところにやって来た。……私たちは後ろのエレベーターで降りていった。彼(ハフ)は人々を驚かせたくなかった。……カストロが親切にも私の手を取ってくれて、私たちと一緒に行きたがった。彼は涙を流さんばかりだった。でも将軍が今朝カ

ストロに、このアパートに留まって部屋を世話するよう命じたことを私はいわざるをえなかったことを覚えている。そこで私は彼をそこに置いていった。カストロ以外の少年たちはすでに去っていた。……（息子の）アーサーは混乱していた。彼は『マミー、〔僕は〕コレヒドールを十分見ているよ』と言った。これは家に戻りたいという意味だったが、私は『もう家に戻ることはできないの』と言った[44]」。

波止場には、小さな蒸気船のドン・エステバン号が待機していた。すでに一〇〇名ほどが乗船していたが、日本軍機の攻撃を恐れて暗くなるまで出発できなかった。やむなくジーンはアーサーをデッキで遊ばせた。午後六時、司令部の幕僚たちが乗船を開始した。そして午後八時、マッカーサーとサザーランドが乗船し、船は岸壁を離れた。午後一一時にコレヒドール島の北デッキに着き、二六マイルの船旅は終わった[45]。そしてマニラの「オープン・シティ（非武装都市）宣言」はその二日後の二六日に出されたのである。

（1） Memo for the Sec. of War, Subj: Strategic Concept of the Philippines Islands, L.T. Gerow, Oct. 8, 1941, RG46.
（2） 〈SEC〉 Memo for the President, Subj: Estimate of Ground forces required, Chief of Staff, Oct. 21, 1941, RG46.
（3） 〈SEC〉 Memo. For the Sec, General Staff, Subj: Air Offensive Against Japan, War Dept. Office of the Chief of Staff, L.S.K., Nov. 21, 1941.
（4） 〈SEC〉 Conf. in the Office of the Chief of Staff, Present: Gen. Marshall, Gene. Arnold, Gene. Gerow, Col. Bundy, WPD, Col. Handy, WPD, 10:40 A.M. Nov. 26, 1941.
（5） 〈SEC〉 Memo. For the President, Subj: Far Eastern Situation, H.R. Stark, Nov. 27, 1941; Hand Writing, War Dept. Office Chief of Staff, 12/1/41.
（6） *Ibid. MacArthur and Wainwright*, p.6.
（7） Oral Reminiscences of Brigadier General Clifford Bluemel, July 8, 1971.
（8） 前掲書『比島攻略作戦』二九頁、三三頁、三九～四〇頁参照。

(9) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.5-6.
(10) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
(11) *Ibid.* Oral Reminiscences of Brigadier General Clifford Bluemel.
(12) *Ibid.* MacArthur and Wainwright, pp.6-10.
(13) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
(14) 〈SEC〉 From Adams to USA Forces Far East Manila PI, Dec. 7, 1941, RG30.
(15) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.11-15.
(16) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』一〇頁。
(17) Record of Telephone Conversation Between Gen. Gerow, WPD and Gen MacArthur in Manila, P.I., Dec 7, 1941.
(18) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』一〇頁。前掲書『比島攻略作戦』一一七〜一二〇頁。
(19) 前掲書『比島攻略作戦』一一四〜一一五頁。
(20) 同上書『マッカーサー大戦回顧録(上)』一一頁。
(21) Oral Reminiscences of Benson Guyton, August 5, 1971.
(22) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; *ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, pp.35-36.
(23) 前掲書『図説マッカーサー』二七頁参照。開戦直前に航空部隊が得た米軍側の情報として、海上兵力は四七隻(重巡洋艦二、軽巡洋艦一、水上機母艦四、駆逐艦一五、潜水艦約二五)であった。前掲書『比島攻略作戦』一一三頁参照。
(24) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』一一頁。
(25) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, p.18.
(26) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』一三〜一六頁参照。
(27) 〈SEC〉 From the Chief of Naval Operations to Chief of Staff, US Army, Subj: The dangerous strategic situation in the Pacific Ocean, H.R. Stark, Dec. 11, 1941.

(28) 〈SEC〉From the Chief of Staff to the Chief of Naval Operations, Subj: Defense of Oahu, Dec. 12, 1941.
(29) 〈SEC〉Draft of WPD Study about 21 Dec. 1941, [General Strategic Review].
(30) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, p.24.
(31) 前掲書『比島攻略作戦』七六頁参照。
(32) 井本熊男著『大東亜戦争作戦日誌』（芙蓉書房出版、一九九八年刊）八六頁参照。
(33) 同上書八七～九〇頁参照。第一四軍以外の南方軍諸部隊は、総司令部（東京）、第三飛行集団（四個飛行団基幹）、第一五軍（三個師団基幹）、第二五軍（二個師団基幹）、川口支隊（歩兵四個大隊基幹）、第一六軍（一個師団と一個支隊基幹）である。同上書八二頁。
(34) 同上書九一頁、一〇一頁、一一四頁、一四五～一四六頁参照。前掲書『大東亜戦争作戦日誌』八八頁参照。
(35) 伴八三「英霊の五十回忌法要を営み、戦ったアノ戦闘の記憶を辿る」（独立行政法人・平和祈念事業特別基金編『平和の礎・恩欠編第三巻』一九九三年）二～三頁、岸本栄太郎「比島バターン攻略戦」（前掲書『平和の礎・恩欠編第五巻』一九九五年）一七八頁。
(36) 同上書一五六頁参照。
(37) 同上書一四四頁参照。
(38) 前掲書『大東亜戦争作戦日誌』八八頁参照。
(39) *Ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, p.36.
(40) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, p.25; *ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, p.36.
(41) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.32-34.
(42) *Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.36-38.
(43) *Ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, pp.37-38.
(44) Papers of Jean MacArhur, Oral History, Transcript #5, RG13〈This interview took places at the Waldorf Towers Apartment on Tuesday afternoon on June 19,1984〉.
(45) Ibid. MacArthur and Wainwright, p.39.

(4) マニラ陥落と第一次バターン攻防戦
——一九四二年一月初旬から二月初旬まで——

1 コレヒドール要塞

オオサンショウウオのような形をしたコレヒドール島は、面積約七・八平方キロメートル、東西の長さが約六三〇〇メートル（頭部の長さが二五〇〇メートル、尾部の長さが三八〇〇メートル）、膨らんだ頭部の南北最長の幅が二一〇〇メートルあり、ロックの名のとおり、岩質性の火山島である。東岸のマニラ市から四一・六キロ、北岸のバターン半島から三・二キロと両者に近接し、マニラ湾を包み込むように、その入口に位置するため、古くは一八世紀のスペイン統治時代から海賊の侵入を防ぐ税関の詰め所として使用されるなど、戦略上重要な役割を担う島であった。マッカーサーの父アーサーが活躍した一九世紀末の米西戦争以後、米軍保留地として徐々に補強され、一九二二（大正一一）年にはマリンタ・トンネルがほぼ完成し、日米開戦前には島全体の要塞化を完了していた。マッカーサーの司令部がマニラから移動してきた当時、海抜二〇〇メートルの頭部の〝トップサイド〟には、直径三～一二インチという大型の沿岸砲五六門の大半と迫撃砲が据えられ、南シナ海からの敵の来襲に備えて西向きに配置されていた。なおコレヒドール島の南側には、フォート・ドラム、ヒューズ、フランクといった小さな島々があり、これらも防備の一端を担っていた。(1)

さて一九四一（昭和一六）年一二月二四日にコレヒドール島に移動した一行は、クリスマスイブをマリンタ・トンネル内の〝ボトムサイド〟と呼ばれる場所で過ごした。マッカーサー司令部が置かれるこのトンネルは、幅約三五フィート（約一〇・五メートル）、長さ約一〇〇フィート（約三〇メートル）、高さ約一二フィート（約三・

六メートル）あり、壁と天井は天然の石灰岩で、床は粗いセメントであった（このセメントは日本から輸入していた）。トンネルは二台の自動車が通れるほどの広さがあり、その両側には枝分かれしたトンネルが多数あった。司令部内では約三〇名の将校と下士官が働いており、その約三分の一は航空部隊将校と副官部将校と中間の幕僚、約三分の一は人事・情報・作戦・兵站のG1～G4各部長と次長、残りの約三分の一はサザーランド参謀長と秘書のロジャーズ軍曹、マッカーサーの二人の副官ハフとディラーがそれぞれ占め、その奥にマッカーサーの個室があった。そのほか病院、休息用営舎、弾薬庫などがあった。(2)

マリンタ・トンネル上の小高い場所が〝ミドルサイド〟、島の中央上部が〝トップサイド〟で、そこに将校の営舎やマニラ湾を守るための大砲があった。二日目のクリスマス当日、マッカーサーは沿岸砲部隊司令官であるジョージ・モーア（George F. Moore）少将の高台の家へ移るとともに、副官のハフに対して、マニラへ戻り、残された司令部内から重要文書などを、彼のアパートから第一次大戦中に使用していたコルト45拳銃、古い戦闘帽、スコッチのボトルなどを持ち帰るよう命じた。そこでハフは夜陰に乗じて高速魚雷艇でマニラ湾を横断し、翌二六日の空襲時、人気のないマニラ市街を走り回り、夜遅くコレヒドール島へ戻った。所要の物とアーサー用のベビーフードも含まれていた。マニラが日本軍によって制圧される一週間前のことであった。(3)

五日目の二九日午前一一時四五分、コレヒドール島に空襲警報が鳴った。日本の中型爆撃機八一機と急降下爆撃機一〇機がついに襲来した。日本軍がマッカーサーらのマニラからコレヒドール島への逃亡計画を察知したのである。これら爆撃機が上空を通過すると、爆弾の投下音が聞こえ、爆弾が地面を直撃した。トップサイドの自宅にいたマッカーサーは、敵機の数を知ろうと庭へ出た。すると直撃弾が家を貫き、彼の寝室に当たり、建物すべてが揺れた。破片が飛んできたが、マッカーサーは垣根の後ろに身をかわして難を逃れた。家事を手伝うフィリピン人少年のドミンゴ軍曹は、自分のヘルメットを脱いでマッカーサーの頭上に乗せようとした。すると、鉄

の破片がそのヘルメットに当たり、ドミンゴは手に怪我をした。しかし、マッカーサーは無傷であった。長時間の空襲（ハフは三時間五七分に及んだと指摘しているが、日本軍の記録では四〇分）が終わると、トップサイドは破片だらけとなった。なお『朝日新聞』は、「マツクアーサー大将は先日来のわが航空部隊の反復爆撃に際し、爆弾の破片を右肩に受け負傷したと伝えられる」と報道した（翌一九四二年一月三日）が、これは誤報であった。

一方ジーン夫人は、サザーランドの副官であるウイルソン大佐（のちのバターンボーイズ）の案内で、三歳のアーサーと家政婦アチューとフィリピン人のベニー少年とともに、すでに指示されていたトンネル内の奥深い避難場所へと急いだ。ジーンはヘルメットも付けず、スラックスを持参しなかったためコットンのドレスで、サンダル履きであった。アーサーはウイルソンから彼のヘルメットを頭にかぶせてもらって逃げた。空襲が終わり、先ほど降りてきた階段を上ろうとすると、階段はすでに跡形もなくなっていた。ジーンはどのようにしてマッカーサーの居場所へ戻ったか思い出せないという。(4)

翌日、マッカーサーは家族を、マリンタ・トンネルから東へ約一マイル離れたボトムサイドの小さな家屋へと移動させた。その近くにはケソン大統領一家とセイヤー高等弁務官一家の宿舎もあった。マッカーサーと家族にはトンネル内にベッドが用意されていたが、マッカーサーもジーンもそこで寝泊りすることを拒んだ。副官のハフは、マッカーサーと家族の状況を次のように観察している。

以後マッカーサーは、日本軍の空襲があると、必ずトンネルの入口で日本軍の攻撃状況を見つめながら立ち尽くした。幕僚の誰もがマッカーサーをこの危険な場所から離れさせようとしたし、少なくとも空襲時にはヘルメットを着用するよう説得を試みたが、彼はまったく聞き入れなかった。そこで幕僚が防護用の大きな電話ボックスを入口に置いた。しかしマッカーサーはズボンの尻のポケットに両手を入れ、パイプを吹かせて、上空の爆撃機を眺めていた。夫人のジーンは、空襲時になると、アーサーと家政婦アチューを急いで車に乗せて約一分半の

このトンネルまで運び、マッカーサーのいる家へ戻った。空襲が終わると、彼女はまた車で戻り、二人を連れ帰ることを繰り返した。一晩に三、四回ということもあった。ジーンは決してマッカーサーを一人にさせなかった。のちに彼女は、「コレヒドール（の滞在期間）は私にとって戦争中もっとも長い時間であった。それは三カ月であったが、オーストラリアで過ごした三年間よりも長かった」と感想を漏らしたという。子息のアーサーは、すぐにコレヒドールの生活に自分を合わせていった。爆弾をあまり気にしなくなった。日が進むに連れて、負傷した兵士が定期的にトンネル内の病院に運ばれるようになり、ジーンと家政婦アチューはアーサーに身震いするようなシーンを見せまいと気を使ったが、アーサーは大丈夫であった。島には中国人の男性でマッカーサーの洋服などを仕立てる職人がいたが、アーサーはこの仕立屋からケソン大統領まで、誰とでも仲良しになった。数週間後には、彼は陸軍看護婦からアイドルとして可愛がられるようになった。(5)

ではなぜマッカーサーは空襲時にヘルメットも付けず、わが身を危険にさらすような行為を繰り返したのか。「私が外に出たのは決して何も勇敢をてらったわけではない。それ（敵編隊機の波状攻撃の模様を観察すること）は私の任務だったのだ。砲台の射手や塹壕の兵士たちも（身体を）露出したところにいるわけだから、そんな時に私が一緒にいるのを見ることは彼らをよろこばせた」と彼は理由を述べている。(6) 自分は弾に当たらないと固く信じていたのか、それとも弾に当れば死ぬまでだと覚悟していたのかは不明であるが、いずれにしても彼のこの恐れを知らない毅然たる態度が部下を心酔させたことは間違いなかった。

この間、ワシントンのマーシャル参謀総長からマッカーサーを激励する暗号電報が相次いで届けられた。しかしいずれもマッカーサーを喜ばせる内容ではなかった。この暗号電報は、二四日にはオーストラリアを拠点として反撃の機会を得ようという構想が提示され、二六日には、ジョージ・ブレット（George H. Brett）少将がオーストラリアでその準備を進めつつあり、ワシントンが極東空軍力を再生させる努力を重ねていることを強調する

と同時に、マッカーサーにとっては相性が悪くマニラを去ったブレアトンと協調するよう求めていた。[7] さぞマッカーサーには不快であったろう。

さらに彼を失望させる事態が生じた。二六日にハート少将率いるアジア艦隊が、南方の艦隊に加わるためにマニラを去ったのである。日本軍主力がルソン島北西部のリンガエン湾に上陸する直前の二一日、マッカーサーはワシントンへ、「できれば海軍を使って、何らかの示威行動をとり、敵が全水域でこのように完全な行動の自由をもっているのを抑制してほしい」との電文を送っていた。しかし、海軍側はそれを冷淡に斥けたのである。空軍に続いて海軍にも去られ、彼は孤立無援の悲壮感を抱いたに違いない。

のちにマッカーサーは、「海軍が西へのすばらしい反撃を開始したのは、フィリピンが陥落したあと幾月も経ってからのことだった」と皮肉を込めて回想している。それでもロックウェル海軍少将が残余部隊の指揮官となり、二六日、コレヒドールへ移動して来た。マッカーサーは、「太平洋戦争が始まったころから、海軍の司令官ハート提督と私の間には意見の食い違いが起こっていた。……ハートはフィリピン群島の命数はすでに尽きていると判断していたらしく、海軍の補給線を確保しておくような努力はまるでしなかった。日本の封鎖に対しても抵抗せず、日本軍のルソン上陸を阻止するため、自分の艦船を危険にさらすようなことは拒絶した」とハート提督を厳しく批判する半面、「だがロックウェル提督の指揮下にあったコレヒドールの海軍無線所、経験豊かな第四海兵連隊、砲艦三隻、掃海艇三隻、PTボート六隻、その他細々としたものは私の指揮下に移された。ロックウェルは有能で協力的な軍人で、フィリピン戦の残りの期間、彼の部隊は目立った活躍を見せた」とロックウェル提督を高く評価している。彼はその功績が認められて、三カ月後、バターンボーイズの仲間に加えられてコレヒドール島を脱出することになる。[8]

2　日本軍のルソン島上陸

マッカーサーは日本軍の動きを次のように見ていた。まず一二月一〇日における、ルソン島北部のアパリと北西海岸のビガンへの上陸と、続く一二日の南部レガスピへの上陸はいずれも「単に予備的」で、こちらの分散と攪乱を目的としたものであるから、「私の（米比軍の）主力は日本軍の主力の侵入に備えて待機させた」。そして二二日、巨大な軍団が三波の輸送船団でルソン島のリンガエン湾に侵入してくると、マッカーサーはこれを日本軍主力と判断すると同時に、第一四軍を率いる本間雅晴将軍がリンガエン湾に上陸した主力とルソン島南部のアチモナンに上陸した別働隊とによって、「われわれを挟み撃ちする戦略」をとろうとしていると察知した。とすれば、「この両部隊が急速に接近すると、私の主力部隊は、中部ルソンの遮蔽物の少ない平野で、敵に前後をはさまれて戦わねばならなくなる」。これを不利と認識した彼は、日本軍の敵を「短期に完全に粉砕する」との戦略を欺く作戦を考え出す必要があった。(9) マッカーサーがただちに案出したのは、バターン半島に全軍を撤退させてそこに立てこもるという戦略であった。これには別段新奇性はなかった。この作戦こそ彼が以前、現実性を欠いていると非難した「オレンジ・プラン」や「レインボーV」への回帰にほかならず、自ら提唱していたフィリピン全島の沿岸で敵を撃破するという戦略の放棄を意味していた。マッカーサーはこの変節を何ら恥じず、何ら弁解もせず、それをまるでなかったもののように無視している。

即座にマッカーサーは次のような防御計画を立てた。「（ウェーンライト少将率いる）第一軍団は、北はリンガエン湾から、南はバターン半島のつけ根までの広い中部平野で、次々に新しい防衛線へ後退する持久戦術をとらせる。この持久行動の援護の下に、（ジョーンズ准将率いる）第二軍団は、マニラの部隊も南部や中部平野の部隊も全部バターン半島に撤退させる。……ここで日本軍の優勢な空軍力、戦車、大砲、兵力に対抗する」。そしてバターン半島に部隊をうまく撤収できたのちは、「まず南シナ海に面するモロンとマニラ湾沿岸のアブケイを結ぶ

線に主抵抗線を置く。この線が敗れたら、約一一・二キロ後方の防御線まで退く。さらに、半島で最高の高地であるマリベレス山脈を越えて第三の防御線をしく。さらにその後方、バターンとは三・二キロの水でへだてられているコレヒドールをバターン防衛の補給基地にし、仮にマニラが陥落しても日本軍がマニラ湾を使えないようにする」。このような四段構えによる防御体制では、「私が（バターン半島の）地形を知り尽くしている」ので、「全部隊を最高度に操作できる」と彼は自信の程を示した。(10)

ではこれに対して日本軍はどう動いていたのか。一二月二七日の時点で、第一四軍司令部は次のような敵情報を得ていた。①中部ルソンの米比軍四ないし五個師団はわが軍の上陸を阻止しようとしたが、第一一師団主力はバクノタン、サンファンビアン間のリンガエン湾沿岸で全滅、第七一師団主力と一部の戦車、騎兵部隊はロザリオ、ボボナン付近で全滅、第九一師団主力もポソルビオ、ビナロナン付近で壊滅的打撃を受けたようであり、イバおよびサンマルセリノ付近にあった第三一師団はマリベレス方面に逐次後退中である。②マニラにあった駐比米師団のその後の行動は不明であるが、一部はアグノ河北岸の戦闘に参加し、相当の打撃を受けた模様である。③米極東陸軍司令部は二四日にマニラを脱し、コレヒドール要塞に退避した。④米比軍は、当分アメリカ本国からの増援を期待できない。

軍司令部は、以上の情報を総合して、米比軍はコレヒドール要塞とバターン半島の一角に拠って持久戦を策することもありうるとは判断したが、依然、既定方針に基づき首都マニラを速やかに攻略するため、当面の米比軍を撃破し、カバナツアン付近に向かって一挙に前進することを決定した。(11)結果として、これが重大な判断ミスの第一歩となる。

二日後の二九日には、戦闘で捕獲した米第二一連隊第一大隊長らに尋問した結果、米比軍はタルラック、カバナツアンの線（つまりリンガエン湾とマニラのほぼ中間の線）を重視していることが判明し、米比軍はこの線を防

守している間はマニラを保持するが、この線が突破されればバターンに撤退するのではないかと推測された。すでに米比軍のマニラ放棄は既定方針となっていたことを軍司令部はまだ察知できていなかったわけである。また二七日のサンフランシスコ放送の傍受により、マニラ市が同日、自ら非武装都市を宣言したことを知らされ、翌二八日には、東京の大本営から軍司令部に「敵はマニラの無防備都市宣言をしたから注意せよ」との通報が届けられた。さらに米比軍は全軍需品をバターン最南部のカブカーベンとマリベレスに集結中であり、敵の司令部がマリベレスへ移動していることが判明した。軍司令部は、米比軍の有力部隊がバターン半島へと逃げ込む形勢を知らされたのである。(12)

このようにマニラ攻略を中心に考えられてきた日本軍と米比軍との戦局が明らかに異変を来たしつつあった。そこで軍司令部は、以後の作戦指導について検討した。秋山航空主任参謀は、「軍主力をもってバターン半島方面に突進し、退却中の米比軍を捕捉するべきである」と主張した。しかし前田参謀長を含む他の幕僚は、大本営および南方軍より与えられた任務からすれば、方針転換は不適当であると反論し、本間司令官の決裁で「マニラ攻略に全力を傾注する」旨の決定が下った。また飛行集団の運用に関する協議でも、航空部隊側から「バターン半島方面の米比軍を攻撃すべき」との強い意見具申がなされ、第四八師団からも「米比軍の退路遮断のためカルンピット橋梁爆撃」を再三求める意見があったにもかかわらず、やはり「全力を第四八、第一六両師団のマニラ進撃に協力させる」ことに決着した。マニラ付近の米比軍の相当部分がサンフェルナンドを経てバターン半島へ退却しつつあることを承知しながらも、司令部参謀たちはなおも有力な残兵がマニラ周辺を防守していると信じて疑わず、この周辺地区で米比軍主力との会戦が起こることを予想していたのである。(13) これが重大な第二の誤算であった。

この〝マニラ突進〟命令こそ、その後の日本軍の運命を決するものとなった。米比軍の動きを詳細に検討する

ことなく、大本営や南方軍の意向に沿っての「迅速に首都マニラを攻略する」との作戦決定は、米比軍がマニラ周辺での決戦を避けてバターン半島へ退却するための時間稼ぎに手を貸したと同然であった。はたして日本軍は翌一九四二(昭和一七)年一月二日にマニラを容易く占領できたが、予想された米比軍主力との大会戦など起こらず、米比軍の大半をバターン半島へと逃がす結果となった。土橋第四八師団長は「ついに長蛇を逸す」と悔しがったが、後の祭りであった。以降、日本軍の苦闘がもたらされるのである。戦後、中山高級参謀は次のように述べている。「一二月二九日頃、空中捜索により米比軍の大部隊がバターンに向かい退却中であることを知った。ただし当時は米比軍がバターンを経て海路他方面に転進するであろうとの判断が強く、バターンに止まって真面目な抵抗を試みるであろうとの判断は重視されなかった。……もし米比軍がバターンへ退却するならばドシドシ退却させたがよい。それだけマニラの占領が楽になる。退却を阻止して、『窮鼠かえって猫をかむ』ようなことをさせるのは策の得たものではないとの考えであった」[14]。マッカーサー軍はバターン南部に踏み止まることなく、海外へと逃亡するであろう、逃亡するなら逃亡させようとの見解は、何ら根拠もなく、驚くほどの主観的考察である。これが第三の誤認となる。

なお昭和一二(一九三七)年度までの参謀本部「年度作戦計画細項」には、米軍がマニラからバターン半島に退避する場合、これに応ずる作戦指導要領が記述されていたが、今回の「第一四軍作戦要領」には米比軍のバターン半島退避に何ら論及がなかった。これについて瀬島龍三大本営参謀は、「マニラ攻略は、その内外に及ぼす影響がきわめて大きく、戦争指導上の価値は非常に重視された。加えるに、敵情判断もまた北部ルソンで決戦が生起するとの判断が支配的であった。したがって第一四軍の任務を、敵の主力撃破とするか、マニラ攻略という土地の攻略とするかが問題となったが、結局、マニラ攻略を主目的とされた」と証言する[15]。

以上のように日本軍が一二月三〇日の時点でも、マニラ方面に残留する米比軍と、バターン方面に退却する米

比軍と、どちらが主力であるかを判定できず、惰性のように既定方針に従ったことは、マッカーサーと米比軍にとっては大きな幸運となった。兵力が乏しく期待されていなかった日本の第一六師団が南部上陸後、予想のほか順調に北進できたのも、南部の米比軍がバターン半島へ猛然と撤退していたのであるから当然のことであった。(16)

3　バターン半島への撤退

こうしてマッカーサー側は日本軍を欺くことに成功し、一歩一歩後退しながら時間を稼ぎ、その間に多くの兵力と兵站をバターン半島に集積できるよう全力を投入した。その際、二つのことが重要な鍵となった。一つは、マニラの重要な軍需施設や軍需品を日本軍に使用させないよう処理できるかどうかであった。この仕事はケーシー大佐が担当した。彼は全部隊が去った二四日以後、小分隊を指揮してパンダカンの巨大な石油施設を爆破し、フォート・マッキンレーやニコラスの航空施設を破壊し、マニラ湾岸の倉庫を燃やし、橋・火力発電所・ラジオ局のほか、マニラ鉄道の二四両の蒸気機関車のボイラーも爆破した。彼は総計一五〇〇万ドルもの財産を木っ端微塵にしたという。このような危険な作業をすべて終えて、マニラ陥落前日の一九四二（昭和一七）年一月一日午前三時、ケーシーは最後の司令部幕僚としてマニラを発ち、ランチでコレヒドールへ向った。もう一つは、部隊と物資がカルンピット橋を無事に通過できるかどうかであった。この橋はサンフェルナンドのすぐ南に位置し、ルソン北部からマニラに走る公道とバターンへ向かう公道との接触点にあり、日本の第四八師団がこれを空爆するよう主張したとおり、ここが戦術的隘路であった。コレヒドールに戻ったばかりのケーシーは、ルソン南部軍が無事にカルンピット橋を通過し、バターン半島に入ったことを知ると、日本軍がこの橋を通過できないよう、部下に命じて一日の午前六時一五分にこれを爆破させた。(17)

日本軍もケーシー・チームの巧みな破壊活動には瞠目せざるをえなかった。次のような記述が残されている。

「米比軍の交通破壊特にアグノ河以南の橋の破壊は巧妙でしかも徹底的で、いままでも数百にのぼる大小幾多の橋が破壊されたが、併行道路、鉄道橋の利用、斜板の構築および工兵隊、道路隊の活動により進撃速度に大きな影響を及ぼされることなくきた。しかしカルンピット橋の破壊の影響は大であった。同橋を通過すべき米比軍最後の部隊（第五一師団第五一歩兵連隊）は一月一日〇五〇〇（午前五時）ごろ通過したので、〇六一五（午前六時一五分）完全に爆破された」[18]。

元旦の早朝、マッカーサーのもう一人の幕僚が危険を冒してコレヒドール島に戻った。マーシャル参謀次長である。彼は兵站業務の責任者として日本軍のマニラ進攻の直前まで、輸送作業を指揮した。脱出時に救助船が到着せず、生涯忘れ得ないほどの危険を強いられたものの、幸い日本軍の進撃が遅れたために九死に一生を得たのである。サザーランドに伴われてマーシャルがマッカーサーに報告すると、マッカーサーはその労をねぎらった。しかしマーシャルは一息つく余裕もなかった。五日にはバターン半島のマリベレス山頂に通信施設を設置し、これを半島の司令部とする仕事が待っていたからである。無事に通信施設の設営を終えた後、マーシャルはここを拠点としてサザーランドと頻繁に交信し、バターン半島の情勢を刻々と伝える業務を行った[19]。

さてマーシャルの決死の搬出作業以後、米比軍の大半は商業用バスやトラックや普通の自動車ばかりでなく、鉄道、船などあらゆる乗り物をすべて徴発し、バターン半島へと物資、弾薬、装備、医療品などを運び続けた。マッカーサーはその状況について、次のように叙述している。「パーカー将軍は、敵の急追を押える仕事に昼夜ぶっ通しで奮闘した。また第一軍団司令官のウェーンライトは敵の前進をできるだけ遅らせるような防御法をたちどころに編み出した。彼の方法は、日本軍が全部隊を展開するまで抵抗して、敵にそれだけの時間を使わせ、敵の展開が終ったとみるやゆっくり後退して、そのあとケーシーが指揮する工兵技術部隊が橋を爆破し、道路に障害物を築くというやり方だった。この戦術が何度も何度も繰り返された。……血みどろの戦いだったが、時間

は稼げた」。また彼は、「この作戦の成功で、私の兵力の大部分がバターン半島に集結して再編され、その後のバターン防衛が可能となったのである。米比両軍の寄せ集め部隊が演じた、この水際立った撤退ぶりは、どこの訓練と経験を積んだ師団にも劣らぬものだった」とその成功ぶりを自賛する。

そしてマッカーサーは、自分がコレヒドールとバターンを完全に押さえている限り、「敵にマニラ湾を使われる恐れはなかった」、なぜなら「敵は瓶を抱えたものの、その栓は私が握っていた」からだ、と自軍の優位性を強調し、自己のマニラの「非武装都市宣言（オープン・シティ）」を正当化した。[20]

マッカーサーに対して比較的厳しいシャラー教授も、「マッカーサーはあらかじめ前方の兵站基地に補給物資を集積するように命令しておいた。防御軍は、日本軍がその兵站基地を席巻する前に、大急ぎでできるだけ多くを回収した。正規の米陸軍部隊〔フィリピンスカウトを含め〕が撤収を総崩れにはしなかった。一月初めには、おおよそ八万の兵士、二万六千の民間人、相当量の物資がバターンに到着している」と、マッカーサーならびに米比軍の迅速かつ見事な移動ぶりを称賛している。[21]

しかし実際はマッカーサーが自賛するほど、またシャラーが称賛するほどではなかった。マンチェスターによれば、マッカーサーの敵主力のリンガエン湾上陸への読みは正しかったが、彼の誤りは、この日本軍の大攻勢が開始されるまで、バターン半島に撤収することもなく、ただ無為に日を送っていたことであった。ルソン北部の方面軍を指揮していたウェーンライトは、米比軍はすばやく半島に退避すると信じていた。しかしマッカーサーは躊躇した。それどころか、マニラ北方一〇〇マイルのリンガエン湾沿岸に部隊を配備し、低くうねって広がる砂浜を警備させ続けたのである。当時第五七歩兵部隊の中尉で、のちに統合参謀本部（JCS）議長になったハロルド・ジョンソン（Harold Johnson）の意見では、リンガエン上陸に抵抗するというマッカーサーの決意は「悲劇的な誤り」であった。マッカーサーは古いパッカードに乗ってルソンを廻り、戦えるところで戦えとフィ

リピン国民を激励していたが、その間に補給物資の移動を監督することもできたはずであった。たとえば、ルソン中部のカバナチュアンの物資集積所だけでも、米比軍の四年分の米などの食糧が蓄えられていた。しかしここの食糧を移すことができなかったのは大きな誤りで、のちに多くの者が飢餓状態に陥った責任はマッカーサーの「虚栄心」に帰すべきものである、とジョンソンは厳しく批判している。(22)

またコレヒドール島の沿岸砲兵隊のガイトン中尉も、補給物資の運搬がうまくいかなかったために深刻な砲弾不足が起こっており、日本軍に十分反撃できなかったこと、また多くの兵士がマニラの倉庫からバターン半島やコレヒドール島への軍需物資や食糧の移動に失敗したと不平を述べていたとの事実を明らかにしている。(23)

とすれば、「バターンへ撤収したことは、フィリピン防衛戦で、私が行った最も重要な決定であるばかりでなく、それから生じた影響という点で、全太平洋戦争を通じての私の最も重大な決定の一つだ」とのマッカーサーのおおらかな自己賛辞は、結局、日本の第一四軍司令部の誤った先入観に基づく作戦ミスの積み重ねと、大本営や南方軍司令部の参謀らのマニラ陥落をパールハーバーに続く内外の宣伝効果に用いたいという功名心に満ちた政治優先主義によって助けられていたのであり、さらにはマッカーサーが平然と復活させた「オレンジ・プラン」と「レインボーV」戦略に基づいての、バターン撤収に向けた「野戦軍司令官と将兵たちの見事な行動」に起因していたのである。(24)

4　マニラ陥落と第一次バターン攻防戦

東京の大本営陸軍部は、一九四二(昭和一七)年一月三日、「帝国陸軍比島攻略部隊は二日午後首都マニラを完全に占領し、さらにコレヒドール要塞およびバターン半島の要塞に拠る敵に対し攻撃を続行中なり」と発表した。マニラは大きな抵抗もなく日本軍の手に落ち、ここにフィリピン作戦は目的を達成したかに見えた。しかもマニ

ラを放棄して袋小路のようなバターン半島に逃げ込んだ米比軍の運命は、「降伏か潰滅か」いずれかであり、フィリピン全島の攻略も「時間の問題」と判断された。当時のマニラ市の状況は、米比軍と警察の撤退とともに無秩序状態となったため、難民が蜂起し、放火が頻発し、商店街は破壊略奪を受けるなど混乱に陥ったが、二日に日本軍が進駐したことでマニラ市の破壊と混乱は収拾へと向った。そして翌三日には、日本総領事館の館員以下約三五〇〇名の在留邦人すべてが無事救出された。「在留邦人は全員日本倶楽部に軟禁されていた。我々の顔を見て涙を流して迎えてくれた。自分も日本に帰ったような気がした」と、一月一日未明にマニラ一番乗りを果した捜索第一六連隊の一兵士は述べている。(25)

このように日本軍は予想より早く、ルソン北部上陸から一〇日ほどでマニラ攻略の任務を達成した。しかしそれは決して完全なマニラ攻略とはいえなかった。単なるマニラの要地占領にすぎず、もっと重要な米比軍〝撃滅〟を達成できなかったからである。それどころか、米比軍は大きな損害を被ることなく、バターン半島へと撤退を完了しており、そのため、マッカーサーが豪語するとおり、日本海軍が熱望するマニラ湾の完全制圧には至らなかった。マニラ湾は右手の親指と人差し指で環を作り、両指の先を少し開いたような形をしている。開いた所が湾口で、西方に向いており、湾口を塞ぐようにして親指の付け根にコレヒドール島があった。湾の南北幅は約六〇キロで、東方のマニラから同島へもほぼ同じ約六〇キロであった。そして人差し指の第一関節がバターン半島で、長さ約五〇キロ、幅約三〇キロであり、広さはほぼ伊豆半島に匹敵する。半島は多くが密林に覆われており、半島の北半分がナチブ大山塊、南半分がマリベレス、サマット両大山塊である。そのバターンの陣地に約八万名の米比軍が立てこもったのである。もっとも第一四軍司令部は、すでに大半の米比軍は撃破されており、残る兵力は二個ないし三個師団にすぎないと考えていた。当時大本営参謀であった井本熊男は、「もとより、わが方にはマッカーサーの作戦指導も、バターン陣地の実状もわかっていなかった」と自戒を込めて証言している。(26)

そこで第一四軍司令部は、軍主力をもってバターンのマッカーサー軍を攻撃することを決し、その準備に着手しようとしていた。ところがその矢先の一月二日夕刻、東京の南方軍総司令部から、第五飛行集団をタイ方面へ移動せよ、また第四八師団も蘭印作戦に使用するために第一四軍から引き抜いて転用せよとの命令が届けられたのである。この転用命令をめぐって、その後しばらくの間、第一四軍司令部内が混乱すると同時に、大本営と南方軍と第一四軍の三者間に紛糾を生じた。前述した井本参謀は、「敵はもう大した力はないと思った」し、「バターンの地形も、米西戦争の歴史も知らない」ため、「命令を白紙還元して、第一四軍本来の全兵力をもって、バターンの処理まで行うべきであるという発想は起こらなかった」と当時の大本営内の雰囲気を語っている。こうして、すでに前年一一月に決定したとおり、兵力の転用を実行することとなった。これが第一四軍にとってきわめて不幸な事態となった。残る兵力は、第一六師団(約七〇〇〇名)と第六五旅団(約七〇〇〇名)を基幹とする地上部隊と、第一四飛行隊の飛行機約七〇機のみとなった。軍はこの残存兵力をもって、いわゆる第一次バターン戦を開始したのである。[27]

先発を命じられたのは、第六五旅団(旅団長は奈良晃中将)であった。この旅団は中国・四国地方で臨時編成されたものであり、占領地守備を目的とした関係上、その編成、装備、素質は通常の野戦師団に比べ著しく劣り、将校以下の大部分は応召者で、各隊はわずかな自動貨車をもつだけで、輜重(輸送部隊)はなかった。奈良旅団長は内地から台湾へ向かって出発する直前、本間司令官から「君のところは第二線兵団として警備担任の予定であるからよろしく」といわれており、明らかに戦闘には不向きな部隊であった。軍司令部は、バターン半島とコレヒドール島に逃げ込んだ米比軍は二万〜三万名と推定しており(実際は八万余名で、これに約二万六〇〇〇名の避難民が加わっていた)、こうした誤算に基づいて、火砲器類をほとんど持たない小銃だけの第六五旅団にバターン攻撃を命じたのである。日本軍が米比軍をいかに甘く見ていたかがわかる。日本軍の苦戦は起こるべくして起

こったといえる。[28]

同旅団のバターン攻略戦は一月九日に開始された。旅団はサンフェルナンド近くで第四八師団と交代して第一線部隊となり、米比軍の第一線陣地に攻撃を加えた。しかし米比軍の抵抗は強力で、日本軍は進撃を阻まれ、惨敗する部隊が相次いだ。当時の戦況について、前記の第九連隊の一兵士は次のように記述している。「〔第六五〕旅団の火力は旧式の山砲四門だけ重機関銃は一大隊に六銃しかないという、ひどいものでした。第九連隊も一緒に戦う予定だった第四八師団が急にいなくなって、代わりにオッサン部隊〔予備役の老兵で編成〕と共同作戦しなければならなくなったわけですからこれは大変だなあと思ったが、いづれにしても敗敵を討伐する位にしか思っていなかったのです。一月九日、先づナチフ山の敵陣を奈良兵団〔第六五旅団〕が攻め立てたが、物凄いジャングル地帯で、鉄条網に囲まれた機銃陣地が堅固に作られ、その上に防御線の前面はことごとく事前に照準されており、十五センチ榴弾砲はねらい違わず我軍を撃ってきました。しかも弾は無尽蔵に射ってきたのにはびっくりしました。こちらはジャングルの中に逃げ込んだが、そこにも砲弾がとんできて全く逃げ場を失っていました。あとで調べたら、あちこちに集音マイクが仕掛けられ、その場所は大砲の照準が決められていたそうです。なお半島は戦前から敵が演習場として攻防戦の訓練をしていた所だったそうですから、敵の庭先のようなところで地理不案内の者が手探りで飛び込んでも勝てる筈がなかったというものでした」。[29]

やむなく日本軍はマニラにいた約五〇〇〇名の部隊を増援に送ったが、敵陣は動揺しない。そこで一月下旬、第一六師団の歩兵二個大隊は、別々に海上からバターン半島の南部西岸に上陸して敵陣の背後に進入したが、いずれも玉砕した。また歩兵一個連隊は危うく全滅するところを寸前で救出された。第六五旅団の損害は、将校の戦死者が一〇％、負傷者を加えると二五％、また下士官と兵卒の戦死者が一〇％、負傷者を加えると二八％に達した。四人に一人が死傷したことになる。前記の兵士の回想を続ける。「武智支隊は奈良兵団の側面を攻撃する

ためジャングルを切り開きながら進んだが、一日にわずか百メートルしか進めなかった。山ヒルの来襲にも悩まされ夜は樹の股にまたがって寝ました。食糧も欠乏し飛行機からの投下物はジャングルに阻まれて地上に届かなかった。じゃが芋を腹一杯食べた夢をよく見たものです。一月下旬ようやくナブチの堅陣を突破した兵団は勇んで敵の第二線陣地であるサマット山の堅陣に立ち向ったのですが、忽ち壊滅的打撃を受け三分の二の兵力を失って後退せざるを得なくなりました。その頃、前述の青写真〔マニラ市役所の地下倉庫で偶然見つかった堅固な敵陣の青写真のこと〕が発見され我軍の首脳部は青くなったといわれ、作戦の中止が決められ」た。大本営陸軍部戦争指導班は、一月一五日の日誌に、「『バタン』半島方面ノ攻撃ハ意ノ如ク進捗セザルガ如シ其ノ罪科最高統帥部ニ在リヤ第十四軍ニ在ルヤ後世史家ニ俟ツベシ」と記している。

激戦一カ月を経た二月八日、本間司令官はバターン攻撃を中止させ、「増援到着を待ち攻撃再興」を決断した。これをもって第一次バターン攻略戦が終わったのである。(30)

5　マッカーサー軍の善戦と苦悩

では米比軍はどのような戦いを続けていたのか。マッカーサーは一九四二(昭和一七)年一月一日、ワシントンの陸軍省に対して、「バターンの第一防衛線はアブケイ＝マウバン、第二防衛線はピラー＝バガグ、最後尾の防衛線はリマイ＝パサワンである。われわれはここで決定的な戦闘を行うつもりである」との決意を伝えた。五日には、前記のようにマーシャル准将の下でバターンに軍司令部が設置され、バターン情勢が逐一コレヒドールの司令部に報告される態勢が整った。一〇日朝、マッカーサーはケーシーの助言を受けて初めてコレヒドール島からバターン半島へ渡り、各陣地を視察した。サザーランド参謀長とマーカット砲兵部長とハフ副官が同伴した。そして一五日、現地の将校たちを前に、「数千の米軍と数百の軍機が救援の途上にある」と演説し、全部隊の士

気を鼓舞したのである。すでにマッカーサーの下へ日本軍総司令官からの攻撃の警告とともに、降伏を勧告する書簡が届けられており、また戦線の米比軍兵士に向けた、降伏を促す無数のビラがまかれた。[31]

降伏の勧告を無視された日本軍は、総攻撃の火蓋を切った。マッカーサーによれば、「日本軍部隊はすさまじい勢いの正面攻撃で、アブケイからモロンに至る三二キロの戦線を突破しようとつとめた」が、地形に精通していた米比軍が「正確な場所に砲列を隠して」おり、「雄牛のように突進して」きた敵軍の側面を砲撃した結果、敵に大損害を与え、「その足を完全に止めてしまった」。こうして米比軍は日本軍の東端のアブケイへの攻撃も、また西端のモロンへの「狂気のような」攻撃も押し戻した。すると「日本軍は損害を補うため、輸送船で新手の部隊を次々と送り込んできた。……前後を通じ一〇万の兵員を補充」した（前記のとおり、日本軍はマニラを警備する第一六師団から五〇〇〇名を増派したにすぎず、「一〇万の兵員」は誤り）。この日本軍の圧力の前に、マッカーサー軍はついに退却を余儀なくされ、「バガクからオリオンにかけての第二の防衛線」に退いた。日本軍はこの線も急襲で突破しようとしたが、これは食い止めた。[32]

確かにマッカーサー軍は善戦した。ケーシーが率いる技術工兵部隊は、いわゆるケーシー・ダイナマイトを多用して道路や橋を爆破し、日本軍の進攻を妨げてきたが、さらには敵戦車が踏めば爆発する電気仕掛けの爆破装置の〝ケーシーの棺桶〟とか、竹の棒の中にダイナマイトや釘やガラスの破片などを内包し、手榴弾と同じ効果をもつ〝ケーシー・クッキー〟などを考案して日本軍を苦しめたのである。[33] ただし既述のとおりマッカーサー軍は、日本軍の第一線部隊が精鋭の第四八師団から劣弱な第六五旅団へと変更されていたことにも助けられたことは否めないであろう。

しかしその戦闘面とは裏腹に、米比軍内部では深刻な問題が発生していた。一月一七日、マッカーサーはワシントンに対して、バターン半島およびコレヒドール島では食糧事情が深刻化しているとの窮状を訴える電文を送

った。その理由の一つとして、彼は避難民の問題を指摘した。「日本軍はバターンのすぐ北のザンバレス州からおびえた住民たちを私たちの戦線へ追い込んで、巧妙に避難民の数をふやした。日本軍は、私たちが避難民に食糧を与えることを十分に知っていたのだが、この人道的な処置は、私たちの食糧のストックにひどく食い込んだ」と語り、マッカーサーは日本軍が米比軍の食糧事情を悪化させる目的で地元住民をバターンへと意図的に追い込んだと非難する。[34] しかし日本軍は米比軍そのものを二、三万名と誤認していたし、ましてやフィリピン人避難民が二万名以上も半島へ移動しているとは想定していなかった。むしろ前記のような米比軍側の証言に従えば、マニラ脱出時にあわてふためいて、将兵に不可欠な食糧運搬を怠った米比軍の責任の方が大きかったであろう。この点をマッカーサーはまったく言及せず、日本軍の非人道的姿勢に焦点を当てて自軍の食糧欠乏を説明している。日本軍の説明の巧妙さよりも、マッカーサーの広報の巧妙さの方が際立っている。

一方、コレヒドール島でも食糧事情は悪化していた。三月にマッカーサーとともに唯一の下士官としてコレヒドール島を脱出したロジャーズ軍曹は、詳細な日記を残しており、当時の窮状を次のように記している。一二月三〇日、「ジャップがわれわれの水槽タンクを砲撃し、新鮮な水を塩まじりにしてしまった。ひどくまずい。私はこの三日間夕食抜きだ」。一月一日、「水不足は危機的」。同月一七日、「食糧不足深刻化。ここでは割り当て欠如」。またマッカーサー一行のコレヒドール脱出を成功へと導いたバルクレー中尉は、次のように証言している。海軍からの食糧の支給がなくなり、自分で何とか生活せねばならなくなった。ある将校は野生の豚を捕まえ、一一一名の兵士とともにそれを焼いて食べた。兵士たちは狂わんばかりだった。また米を探した。ココナツとかコプラとか食べられる物は何でも食べた。あるいは、一般兵士はビタミンAの欠乏で夜盲症になる者が多く、とくに沿岸砲台での夜勤のやりくりが大変になった。[35]

マッカーサー一家も一般人と同じ苦労を味わった。ジーン夫人は、「誰もが何でも食べました。ケソンの家族

が食べ物を持ってきてくれたことを覚えている。缶詰の食料品だった。……私たちの配給はどんどん小さくなった。一日に三回食事ができなくなった。爆撃や砲撃が毎日で夜眠れなくなった」と証言している。すでに日本軍はマニラ南方のカビデ海軍基地に多くの大砲を設置し、朝八時から昼まで四インチ砲をコレヒドールに撃ち込んできた。この時間帯は太陽光の反射の関係でカビデに据え付けられた大砲の位置が測定できなかったからである。空襲も激しく、一月六日の再度の空襲では、一発の直撃弾で三〇名が殺傷された。日本の爆撃機は二万フィート上空を編隊で飛来するが、米軍の高射砲は一万七千フィートまでしか届かないため、日本機を撃墜することが容易ではなかったのである。トンネル内では、傷病兵が昼夜を問わずうめき声をあげていた。結核を患っていたケソン大統領はさらに病状を悪化させ、夜になると彼の激しい咳がトンネル内に響いた。ケソンを眠らせるために、衛生兵がモルヒネを注射しなければならないこともあった。マッカーサーの体重も、コレヒドール要塞に来てから八週間足らずの間に、二五ポンド（一一キロ強）も減った。「最後には、私たちは、日に一千カロリー以下で生命をつながねばならなかった」とマッカーサーはその苦しさを述べている。(36)

しかしワシントンの反応といえば、激励が届くだけであった。ルーズベルト大統領からは「貴下と貴下の将兵のみごとな健闘ぶりに祝意を表する。私たちは誇りと理解とをもって貴下を見守り、貴下のことを考えている」とのメッセージ、またスティムソン陸軍長官からは「貴下将兵の英雄的で巧みな戦いぶりに、将来さらに努力を傾けるよう元気づけられている」とのメッセージが寄せられた。もちろんマーシャル参謀総長からも、たとえば一月二三日には、「貴殿の大胆な指導の下、米比軍の堂々たる戦闘は、すでに勇敢な出来事として国家を鼓舞するものとなっている。貴殿の部隊の成功ぶりは毎日ニュースのトップを飾っている」との激励と称賛の電文が届けられた。戦争開始から数カ月を経ても、日本軍のクラークフィールド攻撃によって自軍の航空部隊が撃滅された責任の件で、マッカーサーを非難した者はワシントンには一人もいなかった。キンメル海軍司令官が日本軍に

よるパールハーバー攻撃の責任を取らされて解任されるといった事態はまったく起こらなかった。マッカーサーが内心、自己に責任追及の手が及ぶことを恐れていたとしても不思議ではなかった。にもかかわらず、ワシントンの首脳は、フィリピン防衛という目的の下に結集し、マッカーサーを絶賛したのである。(37)

それどころか、一月以降、〝マッカーサー熱〟ともいうべきものがアメリカ全土を席巻しつつあった。個人的な激励がマッカーサーの下へ殺到し、多くの州が「州の感謝」を決議した。これは、シャラー教授によれば、「マッカーサーの芝居がかった新聞発表で作られた包囲ドラマを反映していた。また反ルーズベルト派の新聞は、マッカーサーを宣伝のために利用しようと、日本軍に独力で立ち向かう〝ルソンのライオン〟とか〝太平洋の英雄〟としてマッカーサーを描いた。さらにアメリカ全土の都市と町は、橋、街路、建物にマッカーサーに因んだ名をつけた。マーシャルの指摘は誇張ではなく、一月から五月にかけて、新聞やラジオがフィリピンでのマッカーサーの英雄的抵抗を劇的に伝えなかった日は一日としてなかった。マッカーサー司令部はコレヒドールでの三カ月間に一四〇回の新聞発表を行い、記事の多くはマッカーサー自身が書いた。そのほとんどは自分のことに言及しており、あたかも彼が独力で日本軍の猛攻をかわし、東京の戦争計画全体を挫折させたかのようであった。前線部隊と将校はすべての面で信頼されなかった。マッカーサーと広報将校(ディラー)は、肯定的側面のみを強調し、彼らの新聞発表はしばしば架空の戦闘に勝利したと報じていた」。(38)

しかし状況が悪化してくると、マッカーサーの不満も次第に強まり、そのはけ口をワシントンに求めていく。一月中旬頃には、救援は来ないだろうとマッカーサーは悟った。彼の被害妄想という性癖が頭をもたげ、ルーズベルト政権内部や陸軍中枢部が自己を罠に落とし入れようとしていると感じ始める。マッカーサーのそのような心境を、ワシントンとの極秘の交信を知るロジャーズがその日記で次のように代弁している。

一月八日「〔米政府がオーストラリアにいる〕ブレットを極東軍司令官代理に任命したことは、マッカーサーか

らスター性を取り除いた。米陸軍の中心はオーストラリアとなった。フィリピンは脇の問題と化している。〝アメリカを第一に！〟。米大統領はイギリスを救うために自国民を犠牲にしている。……マック〔マッカーサーの略称〕はマーシャルに対し、この地域で海軍部隊をもっと積極的に用いるなど大胆な段階へと踏み出すよう強要した」。一三日「〔マッカーサーが嫌った〕ブレアトンは現地のトップ司令官に任命された。そして〔マッカーサーの元を去った〕ハートは米・英・蘭印海軍のトップ司令官に任命された。ルーズベルトを含めて皆政治家たちだ」。一八日「ルーズベルト、ラジオ演説。『この七二時間以内にフィリピンの状況に決定的な変化が起こる』と。どういう意味か」。二三日「マッカーサー、ワシントンへ電文。敵は本気で撃滅へと乗り出した。海上で敵対する者がないためだ。わが方の損失は重く、三五％を失う。われわれはすぐに最後の拠点〔コレヒドール島〕まで撤退を余儀なくされようと。……マッカーサーは『これほどわずかな軍でここまで戦ったものはかつてない』と自軍の行為を称賛する。彼は自らの責任をワシントンに置き、自己の名声と栄光を永遠のものとしようとしている。〔マッカーサーは〕彼が死亡した場合、サザーランドをその後任とするよう進言している」[39]。

マッカーサー自身は、次のように当時の状況を説明する。「一月一七日の電報を最後に、私は救援を訴えることをやめた。……私はバターンの兵力を二つの軍団に再編し、ウェーンライト将軍指揮下の第一軍団を左翼に、パーカー将軍指揮下の第二軍団を右翼に配置した。部隊は塹壕を掘り、敵のきわめて優勢な砲兵部隊に対抗するため、雑多な寄せ集めで急ごしらえの砲兵連隊が編成された。当時海軍の指揮下にあった第四海兵連隊だけは、バターンの激戦に投入せず、予備隊としてコレヒドール自体の防衛に当らせた」。また一月一三日には、マッカーサーはワシントンの高級副官部に対する秘密の電文で、ロジャーズが指摘したとおり、敵の消耗戦によってわが軍の損失が三五％に達するなど自軍の苦戦を認め、最後尾のコレヒドール島まで撤退を余儀なくされるかもしれないと弱気の予想をするとともに、「私が死亡した場合、サザーランド参謀長を私の後継者に任命するよう進

言する」と最悪の事態を示唆した。翌二四日には、「ルソンでは敵がスービック湾に新軍を上陸させ、私の左翼軍を攻撃し、沿岸の多くの地点を攻撃している。その攻撃は海空軍によって防護されている。私はこれら上陸に対して反攻している。……私はあらゆることを最大限やっている。ビサヤ、ミンダナオは変化なし」とワシントンに報告した[40]。

そして二月上旬、マッカーサーは長文の電文をルーズベルトへ送った。その内容はこれまでの中でもっとも重要なものであった。冒頭、「フィリピンの状況はほとんど絶望的段階へと達した。最終的な行動は避けられないと私は思う」と指摘して、降伏することを示唆した。その際、開戦から九週間を経た今日まで「ほんのわずかの援助もアメリカから届かなかった。援助物資等は蘭印、オーストラリア、アイルランド、イギリスなどから送られている……。英米の海軍は最強の艦隊をもちながら、フィリピンを援助する試みを排除しているように見える。その結果、アメリカはフィリピンをほとんど全滅へと導く運命にある」と怒りと恨みをぶつけた[41]。

もはやマッカーサー軍は戦闘の苦しみ以上に、疾病や飢餓の苦しみにあえいでいた。フィリピン兵は逃亡し始めた。ケーシーは、「配給は欠乏し、バターンでは配給は半分になった。われわれは軽い朝食に軽い夕食で、昼食はなかった。われわれの弾薬の補給はどんどん減っていった。マラリヤが発生した。われわれにはキニーネも予防薬もなかった。部隊は飢えと病気でどんどんと弱まった。私の司令部は絶えず防衛器具の配備と交換作業で多忙だった」と苦悩を率直に明かしている。一月二七日には、左翼軍を率いるウェーンライトがサザーランド参謀長に対して、前線の左右両軍の撤退を協議するためにマーシャル参謀次長の派遣を要請して来た。また二月七日には、「米比軍の将軍、士官、兵などと話し合っても、すぐに米海軍や航空機がやって来て、攻守を逆転できるなどと信じる者は誰一人としていない。……彼らは救援が来ないことを知っているのではないか。彼らの士気がどれほど続くだろうか」との弱気な内部情報がマッカーサーへ届けられた[42]。

他方ワシントンでは、マッカーサーの下で参謀長を五年務め、その後陸軍省のマーシャル参謀総長の下でフィリピン戦線を担当しているアイゼンハワー准将（WPD次長）は、マッカーサーに冷ややかな視線を送っていた。彼の日記には次のような文言が記されている。一月一九日「本日私は六本の電文を用意した。いろいろな意味でマッカーサーはかつてないほど大きな〝赤ん坊〟になっている。しかしわれわれは彼をして戦わせるように努めている」。二三日「本日、もっとも華麗な暗号電文の中で、マッカーサーが〝私が死んだ〟場合の後継者を推薦した。彼はサザーランドを選んだ。これは彼が依然として〝おべっか使い（boot lickers）〟を好むことを示している」。二九日「マッカーサーが洪水のような交信を開始した。それらは彼の方で〔内容を〕拒否することを示唆しているように思われる。……彼は大海軍を集中させるよう論じている」[43]。

アイゼンハワーの日記に記されている内容は、ほぼワシントンのマッカーサー評価がいかなるものであったかを端的に示している。しかし苦境に陥ったマッカーサーを救わねばならない、これがルーズベルト、スティムソン、マーシャル、アイゼンハワーらのジレンマであった。結局、マッカーサーをコレヒドール島から脱出させる以外に残る手段はなかったのである。

（1）「コレヒドール」とはスペイン語で「厳しく懲らしめ、治める者」との意味である。――フィリピン政府観光省パンフレットより。

（2）*Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.56-57.

（3）*Ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, p.42.

（4）*Ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, p.43; Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #5, June 19, 1984. なお日本側の『比島攻略作戦』には、「爆撃隊の全力をもって１２００から１２４０にわたりコレヒドール要塞を攻撃し、米軍高射砲の熾烈な射撃を冒してその軍事施設に至大の損害を与えた」（同書一八七頁）とあり、

日本側と米比側で空襲時間が大幅に食い違う。恐らく日本側の記録の方が正確であろう。

（5）*Ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, p.41&p.45.

（6）前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』四七頁。

（7）Memo for the Adjutant Gen. Marshall, Dec. 24, 1941; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Marshall, Dec. 26, 1941

（8）*Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.42–43; 前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』三三～三四頁参照。

（9）前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』二〇～二一頁、二四頁参照。

（10）同上書二四～二五頁参照。第一次バターン攻略の主力となった第一六師団の野砲兵第二二連隊に所属した一兵士は、「米軍はレーダー網で日本軍を捉え、木と木の間に電線を張り、これに触れると照準を決めた砲が発射される仕組みになっていたそうで、ちょっとやそっとでは攻められない陣地だったそうです。狙撃兵が樹上から狙い射ち、そういう堅固な陣地に加え、急峻な地形は我が軍の攻撃を阻んでいました」と証言している。――西村頼夫「比島バターン半島の戦い」（前掲書『平和の礎・恩欠編第一五巻』二〇〇五年）三五六～三五七頁。

（11）前掲書『比島攻略作戦』一六八頁参照。

（12）同上書一七八頁参照。

（13）同上書一七九～一八一頁参照。

（14）同上書一八二～一八四頁、一九一頁参照。

（15）同上書一八四頁。

（16）同上書一八六～一八九頁参照。

（17）ケーシーによれば、鉱山会社の優れた鉱山技術者が自主的に加わってくれたので、彼らに階級を付けて組織化し、危険な爆破作業を行ったという。なおこの爆破作業はケーシー・ダイナマイトといわれた。*ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; *ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.56–57.

（18）前掲書『比島攻略作戦』一九一頁。

（19）*Ibid. MacArthur and Wainwright*, pp.56–58. 前掲書『マッカーサー元帥とその幕僚第1輯』五頁参照。

(20) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』二六～二九頁参照。
(21) 前掲書『マッカーサーの時代』九三～九四頁。
(22) 前掲書『ダグラス・マッカーサー（上）』二四三頁参照。
(23) *Ibid.* Oral Reminiscences of Benson Guyton.
(24) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』三〇～三一頁参照。
(25) 前掲書『比島攻略作戦』一九三～一九五頁、二〇八～二〇九頁参照。寺島貞次「マニラ一番乗りの道は険しく」（前掲書『平和の礎・恩欠編第一巻』一九九一年）一二一頁。
(26) 前掲書『大東亜戦争作戦日誌』九〇～九一頁参照。
(27) 同上書八九～九〇頁参照。
(28) 前掲書『比島攻略作戦』一〇四頁、二〇四頁参照。
(29) 前掲「比島バターン攻略戦」一七九頁。
(30) 同上一七九～一八〇頁。軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班機密戦争日誌（上）』（錦正社、一九九八年）二一三頁、前掲書『大東亜戦争作戦日誌』九一頁参照。
(31) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』四二頁参照。
(32) 同上書四九～五一頁参照。
(33) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
(34) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』四三頁参照。
(35) Papers of Paul P. Rogers Box 1 Folder #1, RG46; *ibid.* Admiral Charles Bulkeley; 前掲書『ダグラス・マッカーサー（上）』二五七頁参照。
(36) *Ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #5; *ibid. My Fifteen Years With General MacArthur*, p.48; *ibid.* Papers of Paul P. Rogers Box 1 Folder #1; *ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army. 前掲書『ダグラス・マッカーサー（上）』二五七～二五八頁、前掲書『マッカーサー大戦回顧録（上）』四四頁参照。

(37) 〈SEC〉 From Marshall to Gen. MacArthur, Jan. 23, 1942, RG46. 前掲書『マッカーサーの時代』九四頁参照。

(38) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』五一～五三頁、前掲書『マッカーサーの時代』九三～九四頁、一〇〇頁参照。

(39) *Ibid.* Papers of Paul P. Rogers Box 1 Folder #1.

(40) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』四一頁参照。〈SEC, PRIO〉 MacArthur to AGWAR, Jan. 23, 1942; 〈SEC, Priority〉 MacArthur to AGWAR, Jan. 24, 1942.

(41) 〈SEC〉 MacArthur to Roosevelt, no date.

(42) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; J.M. Wainwright, Given to Col. Traywick verbally at Gen. Wainwright's CP, 4:30 PM Jan. 27, 1942; Memo. For Gen. MacArthur, Feb. 7, 1942.

(43) *Ibid. The Eisenhower Diaries*, pp. 44, 46,47.